今日もアレフガルドは平和です

みなみなみな

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
今日もアレフガルドは平和です

【Ｎコード】
Ｎ８３９８Ｓ

【作者名】
みなみなみな

【あらすじ】
「この物語は初代ドラクエ最強の魔王である、ワシこと竜王の活躍を描く超大作じゃ！」
「はいはい、そろそろお昼寝の時間ですよ。寝言は寝て言いましょうね？」

第０歩「……竜王様、ですよね？」（前書き）

そんな竜王で大丈夫か？

ドラゴン「無理そうなのでチェンジでお願いします。」

竜王「おいコラッ！」

第０歩「……竜王様、ですよね？」

アレフガルドの皆様はじめまして、ドラゴンです。

私は「この世界を征服してやるぜ、ひゃっほーい！」とか大口を叩きながら城から一歩も出てこないひきこも…ゴホゴホ、偉大なる魔王であられる竜王様の右腕として、世界を征服するため日々尽力しております。

まぁぶっちゃけると、中間管理職ってやつですね。

「おーいドラゴン、ドラゴンはいないかー？」

そして、この目の前にいるヨボヨボのお爺さ…

「おおドラゴンよ、そこにおったか」

目の前にいるヨボヨボの…

「どうしたんじゃ、ワシの顔に何か付いておるのか？」

事態が把握できずに混乱する私を不思議そうに眺めているのは、ヨボヨボのお爺さん…ではなくて、

「あの…竜王様、ですよね？」

「なんじゃドラゴンよ、ワシの顔を見忘れたのか？」

そう言って頬を膨らませているのは、どうみても１０歳くらいの人

間の少女の姿をした何か…

「いえあの、随分と様変わりされておりましたので…」

「ん？おおーそういえば、いめちぇんというのをしてみたのじゃ！どうじゃ、似合っておるか？」

「…申し訳ございません、私には人間の美醜の機微がわかりません」

幼女姿でセクシーポーズをされても返答に困るので、適当に流しておきました。

「むー、そんなだから竜族はおっきなトカゲなどど人間に嘲笑われるのじゃ！」

そのおっきなトカゲの親玉はアンタでしょうが、とかツッコミを入れるほど私は子供じゃないのでスルーします。

「ところで竜王様、何か御用があったのでは？」

「おーそうじゃった。ドラゴンよ、そなたに頼みたい事があるんじゃが頼まれてくれんか？」

「はっ、何なりとお申し付けください」

どうせ今月発売のマンガを買ってこいとか、変な頼みなんでしょうけどね。

「うむ、ちょっと人間の城まで行って姫を誘拐してきてくれ！」

……訂正、滅茶苦茶な頼みごとでした。

第０歩「……竜王様、ですよね？」（後書き）

亀の如きのろのろへろへろ更新となると思われますが、お付き合いいただければ幸いです。

第1歩「そうそうワシの頭がぱーん…って違うじゃろうがっ！」

「えーっと、竜王様？お気は確かですか？姿が変わったせいで頭も退化してしまったとかですか？」

「…なんかいま、ワシのことをものすごーく馬鹿にしたじゃろ？」

おっと、つい本音が洩れてしまいました。

「いえ、私は竜王様の事を心より尊敬し、お慕いしております。」

「そ、そうか？な、なら別に良いのじゃっ！」

竜王様は何やら顔を赤らめて怒ってらっしゃいますが、今の言葉に嘘偽りはありません。

私がこうしていられるのも全ては竜王様のお蔭であり…まぁこの話は長くなるので、またの機会にしましょう。

「それでその…なんの話じゃったかな？」

「竜王様の頭が残念な事になってしまった、という話でしたね」

「そうそうワシの頭がぱーん…って違うじゃろうがっ！」

見た目が幼女だからつい遊んでしまいましたが、そろそろ身の危険を感じるので本題に戻りましょう。

「人間の姫を誘拐しろとか寝呆けたことをぬかしていた件ですか？」

「それじゃ！ほれ、あっちに人間の建てた町と城があるじゃろう？あそこから姫を誘拐してくるのじゃ！」

竜王様の指差す先には、確かに対岸にある人間たちの町と城（ラダトームとか言ったでしょうか？）が見えます。

「確かにあそこなら姫君の一人や二人はいるかもしれませんが…何故に誘拐なのですか？」

この辺鄙な山奥にあったボロボロの城を居城とし、世界征服を掲げて早１００年…マンガやらゲームやらにハマって引き篭もってた竜王様がついに動き出してくれたのは嬉しいのですが、わざわざ誘拐などせずとも、街も城も全て破壊して竜王様のお力を誇示した方が良いのではないでしょうか？

「ふん…甘いなドラゴンよ、確かにワシの力を持ってすれば人間の国の１つや２つを滅ぼす事など簡単なことじゃ。」

「でしたら尚のこと、人間の姫君の誘拐などと面倒な事をなさらずともよろしいのでは？」

玉座に座り踏ん反り返る竜王様…というと威厳があるように聞こえるかもしれませんが、実際は椅子に座って大人ぶってる幼女にしか見えないのがいろいろと残念です。

「…ドラゴンよ、ワシは人間たちを滅ぼしたいのではないことは知っておるじゃろう？」

「まぁ…人間がいなくなってしまったらマンガもゲームも手に入ら

なくなりますからね」

私としても竜王様が世界を治めることに意義を見出しているのであって、その世界に人間がいてもいなくても特に気にはしませんが。

「うむ、つまりは不必要な戦いは文字通り必要が無いというわけじゃ。」

竜王様のこういう所はよく魔王らしくないと言われますが、私としては嫌いではありません。

臆病風に吹かるわけではありませんが、欲望のままに戦って無駄な消耗をしても意味がありませんしね。

「なるほど、つまりは誘拐した姫君を盾にして人間に服従を迫る訳ですね？」

「このワシがそんな姑息なことをするわけなかろうが！」

おおっと即答で否定されてしまいました。

確かにヒキコモリ…もとい、偉大なる魔王である竜王様がそんな回りくどい事をするとは思えませんが…

「ふっふっふっ、このワシがどんな素晴らしいことを考え付いたのか、気になるであろう？」

「いえまったく」

「そんなに気になるなら教えてやろう！」

もはや人の話を聞かないほど有頂天になってる竜王様の話をまとめると、こんな感じです。

1．人間の国の姫君を誘拐し、人間たちに竜王様の名を知らしめる。
2．姫君を取り返すためにやってくる人間たちを倒していると、人間の中から勇者と呼ばれる存在が誕生する。
3．勇者は数々の苦難を乗り越えて成長し、やがて姫君を助け、竜王様と合間見えることとなる

「どうじゃ、我ながらホレボレするほど完璧な考えじゃろう？」

どうだとツルペタな胸を張る竜王様。

ええっと…どうしましょう、何がしたいのかさっぱり解りません。

そもそも奪還される事を前提として姫君を誘拐するとか、人間を蹴散らしてればそのうち勇者が生まれるご都合主義設定とかツッコミ所が満載なのですが…

「人間たちの希望となった勇者を倒し、人間たちを絶望に追い込み支配する…と？」

「じゃからワシがそんな姑息な事をするわけなかろうが！」

「えぇー…」

なんかもう竜王様が何を考えているのかまったくわかりません。いや、今までもよくわからない人（魔王？）でしたけど

「まったく、ドラゴンはどうしてそんなに負の感情で人間を支配しようとするのじゃ？そんな方法で支配をしたら人間たちの作る面白いマンガやゲームがなくなってしまうではないか！」

魔王とか名乗ってる貴方がそれを言いますか、とかツッコミをするほど子供じゃないのでスルー致します。

「申し訳ございません、私如きでは竜王様のお考えに辿り着く事が出来ないようです。どうか詳しくお教えいただけますでしょうか？」

「い、いやいやいやいやっ！ワシの言葉が足りなかっただけで、ドラゴンは良くやってくれておるし、ワシのその…一番の理解者なんじゃからそんなに自分を卑下にせんでも…」

また顔を赤らめて挙動不審になっていらっしゃいますが、風邪でしょうか？

「つ、つまりじゃ！人間たちの希望となった勇者を…」

「勇者を…？」

「勇者をワシのこの大人の魅力で虜にしてしまうことで、勇者ですらメロメロにしてしまうワシに人間たちもみんなメロメロにしてしまうという作戦じゃっ！！」

「……」

第2歩「……あ、そろそろお昼寝の時間ですよ。寝言は寝て言いましょうね？」

「うぉぉいっ！？主の命令を寝言で片付ける気かおぬしはっ！？」

いや、だって…ねぇ？

「だいたい、何のためにワシがこの悩殺ぼでぃにいめちぇんをしたと思っておるんじゃ？」

その姿に悩殺されるのはかなりコアな層だけです、とかツッコミをするほど子供じゃ…（以下略）

「まーその勇者を誘惑云々とか、戯言の辺りはよしとしましょう」

「…何か言葉にトゲがあるように聞こえるんじゃが？」

「気のせいです。そんなことよりも、竜王様のお話の前提となる勇者ですが、本当に現れるのでしょうか？」

普通の王なら自分の姫君が誘拐されたら、勇者なんているかもわからない人間一人に任せるのではなくて、軍隊を差し向けてきそうな気がするんですけどね。

「安心せい、その辺りはルビスから聞いたから大丈夫じゃ。」

「ルビス…ですか？」

はて、何処かで聞いた名前ですね？

「ん、お主には話しておらんかったか？少し前にこの世界は自分が創ったなどど言ってるチンチクリンと会ってのう、とりあえず格ゲーでボコボコにしたら

「アンタなんて何れ生まれる勇者にいぢめられちゃえば良いんだーっ！！」

とか泣きながら捨て台詞を吐いて逃げていったんじゃがな。」

「……まぁ、類は友を呼ぶと言いますしね」

深く考えない事にしましょう。

「とにかく、そんな訳じゃから頼んだぞ！」

「……了解致しました。」

これ以上は何を言っても無駄でしょう。

こうして私は竜王様の命令を果たすべく、人間の城へと向かう事となりました。

第3歩「こうやって異性の2人が一緒にお祭りを見て回ることをその…周りの人

そんなこんなでやって参りました、人間たちの城…の城下町である
ラダトームの街。

「ここが人間たちの街か、凄い人の数じゃのぅ。」

…何故か竜王様も一緒に。

竜王様曰く…

「聞けば人間たちの国では建国記念祭とかいうお祭りの真っ最中と
のことじゃ。祭り中は警備も普段より厳重になっておるじゃろうし、
ドラゴンだけでは大変じゃろうからワシも一緒に行くとしよう。べ、
別にお祭りを見に行きたいとかじゃないぞ！違うんじゃからな！？」

とのことですが…。

「む…ドーラ！アレは何じゃ？」

「あれは綿飴というお菓子です、リュン様。」

「ほほぉ、あれはお菓子なのか。では世界を征服したときのために
今のうちに食しておこうではないか！」

「はいはい、今買ってきますので少々お待ちを。」

誘拐という隠密性が求められる目的の中で、竜王やらドラゴンやら
と呼び合うのは問題があるため、お互いに偽名を決めた上で私も人

間に化けているのですが…まぁ堂々と出店を診て回っている時点で隠密も何もないですけど。

「あむあむ…おおっ！？このわたあめというお菓子は美味じゃの～♪あ、ドラゴ…じゃなくてドーラよ！あっちのリンゴのようなものはなんじゃ？」

「あれはりんご飴です…ってリュン様、当初の目的をお忘れじゃないでしょうね？」

「目的？……も、もちろんじゃ！ワシがそんな大事な事を忘れるわけないじゃろう！？だがその前に、りんご飴とやらも今後のために食しておこうぞ♪」

まぁ、これも竜王様の脱ヒキコモリの第一歩と考えれば無駄ではないでしょう…たぶん。

「はむはむ…おおっ！これも美味じゃの～♪」

「ほらリュン様、ちゃんと前を見て歩かないと転んでしまいますよ？」

「わ、ワシはそんなに子供じゃないぞっ！」

そう言って頬を膨らませている姿は、どう見ても子供にしか見えないんですけどね。

「そ、それにだな！こうやって異性の2人が一緒にお祭りを見て回ることをその…周りの人間がどう見るか知っておるか？」

「もちろん、わかっております。」

「そ、そうなのか？そ、その割にはあまり緊張してないのだな…」

ふむ、よく考えてみれば竜王様はひきこもり…もとい、城からあまり出たことがないのでしたね。

いきなりこんなに人間の多いところに出てくれば、緊張もしてしまう事でしょう。

ここは部下としてしっかりと支えなくてはいけませんね。

「そんなに緊張しなくても大丈夫ですよ、我々は何処の誰が見ても親子連れの観光客ですから。」

「そ、そうじゃな！何処から如何見ても親子連れの観光きゃ……は？」

「はい、さっきりんご飴を売っていた屋台の人間からも、とても仲の良さそうな親子だと太鼓判を押されましたから…ってリュン様？どうかされましたか？」

「…ちょっと、さっきの屋台の人間を恐怖のどん底に叩き落してくる。」

な、何やら竜王様から黒いオーラのが出ているのですが…

「リ、リュン様！？何をそんなに怒っていらっしゃるのですか？大丈夫です、我々が親子だと疑っている者などおりませんよ。」

「じゃ、じゃから！普通は若い男女が一緒にお祭りを見て回っていればその…あの、だから…ええいっ！もう知らん！ドラゴンの馬鹿あっ！！！」

「リュン様！？人前では偽名を…ってどこへ行かれるのですかっリュン様ー！？」

うーん、そんなにりんご飴がお気に召さなかったのでしょうか？

第4歩「あっはっはっ、面白いこと言う子だなー…そうだ、そんな竜王ちゃんに

「これが人間の城ですか。ふむ、近くで見るとなかなか立派なものですね。」

「もぐもぐ…ふんっ！ワシの城の方がずっとカッコイイわっ！」

何とか機嫌を直してくれた竜王様（＋チョコバナナ）とやって来たのは、ラダトームのお城。

今回の旅の目的にして竜王様の世界征服の第一歩となる、人間の姫君の誘拐を実行するときがきました。

「さて、どうやって中に入るとしますか…」

見たところ、入り口には門番らしき兵士が2名。

いくら祭りの最中で騒がしいとはいえ、さすがに無策での正面突破は難しいですね。

「任せておけドーラよ、ワシに考えがあるのじゃ！」

そう言って自信満々の表情で門番の下へ歩いていく竜王様。

流石は竜王様、なんだかんだでちゃんと考えてい…

「おい、そこの人間よ。」

「うん？なんだいお嬢ちゃん、迷子かい？」

「ち、違うわっ！聞いて驚くなよ！？ワシはここの姫を誘拐に来た竜王じゃ、痛い目を見たくなければ大人しく姫の下に案内するのじゃ！」

うわー直球でいきやがりましたよこのヒキコモリ幼女。

そんなこと言ったら門番も警戒して…

「あっはっはっ、面白いこと言う子だなー…そうだ、そんな竜王ちゃんにはこのアメをあげよう。」

「うむ、これはなかなかの美味…っておい！」

…今日もアレフガルドは平和なようです。

第5歩「私は父親ではありません、私はこの御方の…」

アレフガルドの皆さんこんにちは、ドラゴンです。

竜王様と私は現在、人間の姫君を誘拐するためにラダトームの城に来ています。

そして、現在の状況を一言で説明すると…

「竜王ちゃんには、こっちのリボンも似合うんじゃない？」

「それよりも、こっちのゴスロリ衣装の方が絶対に似合うわよ！」

「ここはあえて、男物のワイシャツ一枚にすることで、幼さの中に見え隠れする淫美を引き出したほうが…」

「ええいっ！ワシは用事があるんじゃからやめ…って服を脱がそうとするなっ！」

…竜王様が大人気です。

「魔王がいた頃と違って、平和な今じゃ城の出入りは自由だから、好きに見学していいよ。
あ、竜王ちゃんにはこのチョコもあげよう♪」

城への出入りについてそれとなく聞いてみたところ、門番から返ってきた返事は、驚くほどあっさりしたものでした。

「はぐはぐ…ふん！人間どもめ、すっかり平和ボケしておるな。」

「まぁそのお蔭で、こうして城に入ることが出来たのですから、今は良しとしましょう。」

「むー、ワシが世界を征服した暁には徹底的に、危機管理というものを叩き込んでやるわっ！」

征服する側の、しかも魔王がそれを言うか、とかツッコミを入れるほど私は子供じゃないのでスルーします。

「とにかくじゃ、あの門番の話のとおりなら、姫君は自室にいるそうじゃからさっさと…「あ、あぶないっ！」にゅわっ！？」

「竜…リュン様っ！？」

竜王様の悲鳴に慌てて振り向くと…そこにはバケツを装備し、びしょ濡れになった竜王様が。

「リュン様…バケツを兜代わりに装備するのはどうかと…」

「違うわっ！うーっ早くこれをとるのじゃーっ！」

「いやしかし、武器や防具は買っただけでなく、ちゃんと装備しないといけませんし。」

「お前は何処の武器屋のオヤジじゃっ！？」

「ご、ゴメンなさい！手が滑ってしまって…大変っ服がびしょ濡れ

だわ！」

二人でドタバタとしていると、上の階から数人のメイド服姿の少女が慌てて駆け寄ってきました。

「いえいえ、こちらもよく前を見ずに歩いていたのも悪いのですから、気にしないでください。」

「え、でも…」

「そんな格好じゃ風邪を引いてしまうわっ！」

「控え室に予備の服がありますから、それを…」

と、上から順にメイド少女A・B・C。

それにしてもよく似てますね、三つ子でしょうか？

そんなこんなで、メイド少女たちに連れられ控え室に来たところで、冒頭に戻ります。

「竜王ちゃんは可愛いから何を着ても似合うわねー…あ、このヘアバンドもつけてみましょ♪」

「うーん、ニーソックスは白よりも黒の方が良いかしら？」

「しっとりと濡れた髪も魅惑的でなんとも…」

「じゃから自分で出来るから服を脱がすなと…や、やめろ！下着は

関係ないじゃろうがっ！？」

もはや隠密なんて言葉は何処へやらで、いつの間にやら最初の３人だけでなく、たくさんのメイドが集まって随分と賑やかな事になっています。

「そうだわっ！せっかくだから、何が一番似合うのかパパに決めてもらいましょう！」

「私は父親ではありませんよ。」

「っ！ド、ドラゴ…じゃなくて、ドーラ？」

私の言葉が意外だったのか、竜王様が目を丸くしておりますが、私だって察することくらい出来ます。

「私は父親ではありません、私はこの御方の…」

竜王様と私の関係、そして竜王様が先に言いたかったこと。

それはつまり…

「私はこの御方の…

兄です。」

「……」

どうやら当たりのようですね、竜王様も感激に肩を震わせて…

「…ど、どど、ドラゴンの大馬鹿ものぉーっ！！！！！！！」

ええーっ！？

第6歩「魔王だよっ！？」

「はぁ、はぁ…こ、ここが姫の部屋か？」

「はい、そのようです。」

幾多の苦難を乗り越え（主に龍王様が）、我々はついに目的地へとたどり着きました。

どうでもいい事ですが、前回の龍王様の衣装の件は、予備のメイド服を借りることで落ち着いたようです。

汚れた服は後日、洗濯して自宅に届けてくれるとの事でしたので、竜王様は馬鹿正直に御自分の居城の場所を伝えていましたけど…本当に届くんでしょうか？

「よし！ドラゴンよ、姫の誘拐についてはワシに考えがあるんじゃ！」

「却下」

「うぉいっ！まだ何も言っておらんじゃろうが！？」

「どうせまた、正面突破とか言い出すのでしょう？」

「うっ…い、いや、今回はちゃんと考えがあるんじゃ！」

図星ですか。

「そ、その…あれじゃ！一緒に来てくれたら世界をはんぶんこすると言えば…」

「何を魔王みたいなことを言ってるんですか？」

「魔王だよっ！？」

…おおう、すっかり忘れてました。

「そんな戯言…失礼。そんな妄言は良いとして、私に考えがございます。」

「…言い直したことにどんな意味があったのか、トコトン問い詰めたいところじゃが、とりあえずは話を聞こうか？」

何やら竜王様から黒いオーラが出てる気がしますが、気のせいですよね？

「ここは誘拐の王道でいきましょう。まずは部屋に入ると同時に竜王様がラリホーを唱えて姫君を眠らせて、このキメラの翼で居城に戻りましょう。」

「ふむ…しかし、それでは魔王であるワシの威厳を示す場面がないのではないか？」

「…そんなにまたお菓子が欲しいなら、帰りに買って差し上げますから我慢してください。」

「どういう意味じゃそれは！？」

いや、幼女が魔王だなんだと言っても、ねぇ？

「ま、まぁ…これはもともとドラゴンに命令したことじゃし、お主の案を採用してやるとしよう。」

「ありがとうございます。では、竜王様の詠唱が終わったタイミングで、私が扉を開けますのでよろしくお願い致します。」

「うむ、任せておけ！」

そう言って呪文を唱え始める竜王様。

なぜ自分で呪文を使わないのか、ですか？

残念ながら私は呪文を使うことが出来ないのです。

このあたりが、ドラゴンは大きなトカゲ等と言われる所以なのかもしれませんが、こればっかりは適正が無いのだからどうしようもありません。

おや、竜王様の呪文が完成したようですね。

辺りに人の気配が無いことを確認し、扉を開けましょう。

「覚悟しろ！ラリ…「あーっ！アンタはイジワル魔王じゃないのっ！！」」

…なかなか、世の中は思うようには行きませんね。

第7歩「…どちら様でしょうか？」

部屋の中には、一人の美しい少女がいました。

歳は１５・６歳くらいでしょうか？

驚いて見開かれた青き瞳は、何処までも続く海を思わせるような深みと美しい輝きを発していて、金色に輝く髪は腰の辺りでサラサラと踊り、透けるように白い肌を純白のドレスで包みこんだその姿は、まさしくお姫様という言葉が相応しい美しさと愛らしさを持っている少女です。

そして…

「な、なんで魔王がこんなとこにいるのよ！？まさか…またアタシを虐めに来たの！？」

そう言って竜王様を威嚇しているのは、人の頭ほどの大きさの羽虫…もとい、精霊でしょうか？

「ええい！人の呪文の邪魔をしたのは誰かと思えば…人聞きの悪いことを言うな！だいたい、難癖をつけてきたのはお前じゃろうが、このチンチクリンっ！」

「誰がチンチクリンよっ！？」

何やら因縁があるようですね。

「えっと、竜王様のお知り合いですか？」

「ん？ドラゴンには前に話したと思うが、こやつが創造主とか寝言を言っておったルビスとかいうチンチクリンじゃ」

「だからチンチクリンって言うのはやめなさいって言ってるでしょ！？」

魔王と精霊の対立…といえば聞こえはいいですが、実際は子供の喧嘩にしか見えないのが残念です。

「チンチクリンをチンチクリンと言って何が悪いのじゃ？ここにいるのだって大方、迷子にでもなったのじゃろう？」

「むっかー！人間たちの建国記念際っていうのは、同時にこの世界の創造主たるルビスを敬う祭りでもあるのよ。だからアタシがここにいることは全然おかしくないの！
ここにいておかしいのは魔王であるアンタたちでしょ！？」

「ふん！聞いて驚くなよ？ワシらは大変重要なみっしょんの最中なのじゃ！だから邪魔をする出ないぞ？」

「魔王が何か企んでるのを聞いて、黙ってられる訳ないでしょ！このヘッポコ魔王！」

「ワ、ワシがヘッポコじゃと！？チンチクリンに言われたくないわっ！」

「へへーんっ！ヘッポコヘッポコ～♪」

「うがーっ！いい加減にせんと、また泣かせるぞ！？」

「今度はこの前みたいにはいかないわよっ！」

「あの…」

『なんじゃ（なによ）っ！？』

「…どちら様でしょうか？」

『……え？』

第8歩「ふははは っ！ワシは世界を支配するヘッポコ魔王…ってヘッポコは余計じゃ！」

「えっと…人に名前を聞くときは、自分から名乗るのが礼儀ですよね。私はラルス１６世の娘、ローラです。」

確か、ラルス１６世とはこの城を治めている王の名前であったはず。ということは、この少女が姫君であることは間違いないようですね。

「それと、こちらのルビスちゃんはお知り合いみたいですね。ちなみに、このルビスちゃんとは先程、お友達と逸れて泣いていたルビスちゃんを、保護したことがきっかけで知り合ったところなんです。」

「なんじゃ、やっぱりまた迷子だったんじゃないか。」

「ちょ、ちょっとローラ！人聞きの悪いこと言わないでよっ！アタシはちょっと一人でお祭りを見て回りたかっただけで、迷子になったわけじゃ…」

「あら、そうだったのですか？道の端で捨てられたチワワのように泣いていたので、てっきり迷子になってるのかと思いましたが、どうやら私の勘違いだったようですわね。」

「ほーそうか、また泣いておったのか？」

「な、泣いてないわよ！あ、あのときはちょっと…目にゴミが入ってたのよ！」

あたふたと慌てる精霊を尻目に、終始ニコニコ笑顔のローラ姫。

ふむ、この姫君にはどこか親近感を抱けるのは何故でしょうか？

「自己紹介が遅れまして申し訳ございません。私はドラゴン、こちらの幼女…もといヘッポコ魔王こと竜王様の従者をしている者です。」

「ふははっ！ワシは世界を支配するヘッポコ魔王…ってヘッポコは余計じゃっ！」

「流石は竜王様、ノリツッコミも完璧ですね。」

「そ、そうか？まぁワシに不可能なことなど無いということじゃな、はっはっはっ！」

「話を逸らされた事に気づきなさいよ…。」

竜王様の、こういう天然なところも魅力のひとつだというのに、まだまだわかっていませんね。

「まぁ！そちらの竜王ちゃんは魔王なのですか？」

そしてこの姫君は、目の前に魔王が現れたのに、何故に瞳をキラキラと輝かせているのでしょうか？

「ふっ、聞いて驚くなよ？ワシはお前を誘拐しに来たのじゃ！」

「あらら、私は誘拐されてしまうのですね♪」

「さぁワシに前に平伏し許しを請うのじゃ！」

「流石は竜王ちゃん、魔王の威厳がありますわ♪」

「わっはっはっ！そうじゃろそうじゃろ…って頭を撫でるでないっ！」

「うふふ、竜王ちゃんは魔王だけあって、撫で心地も流石ですわー♪」

「ふにゃ…ってだからやめんかっ！！」

初対面で本気モードの竜王様を華麗にスルーするとは、ますます親近感が募りますね。

「そういえば、頂き物のケーキがありましたわね。皆でお茶にしましょうか？」

「ケ、ケーキじゃと！？ふ、ふん…仕方が無いから付き合ってやろうではないか。

…べ、別にケーキが食べたいわけじゃないぞ！？ローラ姫に最後の晩餐を楽しませてやるためであって、決してワシがケーキを食べたいとかじゃないのじゃからな！？

…して、どんなケーキがあるのじゃ？」

「では、私が紅茶を入れてきましょう。」

「あらあら、ではよろしくお願いしますわね、ドラゴンさん。

えっと、このケーキが苺のショートケーキで、こっちがチョコレートケーキ、こちらのがチーズケーキ…あら、どうかしましたのルビスちゃん？」

見れば俯きプルプルと震える精霊が。
ケーキは嫌いなんでしょうか？

「どうしたんじゃチンチクリン。トイレなら早く行って来ないと、お主の分まで食べてしまうぞ？」

「……な…ななな、何で和んでんのよアンタらはぁぁぁっっっ！！！！！！！！！」

どうやら、カルシウムが足りないようですね。

第9歩「あ、わかりました。ルビスちゃんは構ってくれなかったから焼きもちを妬いているのですわね？」

「こいつは魔王なのよ！？ま・お・う・っ！アンタを誘拐しようとしてる悪いやつなのに、なんで和んでるのよ！？」

「あ、わかりました。ルビスちゃんは構ってくれなかったから焼きもちを妬いているのですわね？」

「違う！人の話を聞きなさ…うにゃぁ……はっ！？撫でるなー！！！」

「まったく、これだから子供は…仕方が無いのう。ほれ、お前から好きなケーキを選ばせてやろう。」

「アンタに子供とか言われたくないわよっ！！」

「まぁまぁ。皆さん、紅茶が入りましたのでどうぞ。」

「…あら、結構美味しいじゃない？」

「本当ですわ！いつもと同じ葉なのに、こんなにも良い香りを出せるなんて流石はドラゴンさんですわ。」

「ふん、ワシのドラゴンならこのくらい朝飯前じゃ！」

「ご期待に添えたようで何よりでございます。それではケーキをお取り致しましょう、皆さんは何になされますか？」

「ワシはこの苺のショートケーキじゃ！」

「あ！アタシもそれ狙ってたのに…しょうがないからこのチョコレートケーキにしようかしら。」

「では、私はこちらのチーズケーキにしますわ。」

「かしこまりました、少々お待ちくださいませ。」

ケーキを取り分ける際の注意点は、力を入れすぎないこと。
特にショートケーキのようにホイップクリーム等を使用しているケーキについては、クリームが崩れないように、生地の部分を掴む様にするのがポイントです。

「それでは頂きましょうか、皆さんのお口に合うと良いのですが。」

「はむはむ…おおっ！美味じゃのー♪」

「もぐもぐ…まぁ悪くは無いわね。」

「まったく、素直じゃない奴じゃのう…そんな奴にはこうじゃ！」

「ああっ！人が楽しみに残しておいたチョコのお菓子をよくも…もう許さないわよっ！こうしてやる！！」

「にょわっ！？い、苺を盗るとは卑怯じゃぞっ！」

「へへぇーん、油断したヘッポコが悪いのよーだ！」

「ええい許さん！これでどうじゃ！？」

「ちょ！？この、やったわね！？」

「ほらほら竜王様、フォークで突付き合っては行儀が悪いですよ？」

「ルビスちゃんも、まだまだケーキはありますから、仲良く食べないといけませんわよ？」

「むぅ、仕方が無いのう…。」

「まぁ、ローラがそう言うなら…。」

素直なことは大変結構、意外とこの二人は気が合うのかもしれませんね。

第１０歩「あ……」（前書き）

第１０歩「あ……」

楽しい時間とはあっという間に過ぎてしまうもの。
天高く上っていた太陽も、大部傾いてきました。
そろそろお暇しようかと、竜王様に声をかけようとしたときでした。

「む、チンチクリンよ。何か落としたぞ？」

「え、あっ！」

振り向くと、そこには大人の手のひらほどの大きさの黄金に輝く丸い石が。

「まぁ！とても綺麗な石ですわね。」

「ふふん、当然よ！なんといってもこれは伝説の光の玉なんだから」

そういって石を掲げて胸を張る羽虫…もとい精霊さん。
どうでも良いのですが、大切なものなら、もっと大切に扱ったほうが良いのではないでしょうか？
人間の手のひら程といっても、人の頭くらいしかない精霊にとっては一抱えほどの大きさなのですから…

「あ……」

案の定、バランスを崩した精霊の手から零れ落ちた光の玉とやらは、重力に逆らうことなく落下していき…

ぱりーん

『……』

粉々に砕け散りました。

第１１歩「しょうがないで済んだら魔王はいらんわっ！」

辺りが真っ暗になったかと錯覚するほどの沈黙を破ったのは、我らがへっぽこ…もとい、竜王様でした。

「おい、チンチンクリンよ。お主、その石を光の玉とか言っておったが…」

「じ、冗談よ！もうっ冗談に決まってるでしょ！これは只の綺麗な石なんだから、割れたって何の問題もな…」

【おい何事だっ！急に空が真っ暗になってしまったぞ！？】

【馬鹿なっ！？ついさっきまであんなに良い天気だったというのに…】

『……』

どうやら、周囲が暗くなったのは気のせいではなかったようですね。

「おいチンチクリン！どうするんじゃこの状況を！？」

「し、しょうがないじゃないの！手が滑っちゃったんだからっ！」

「しょうがないで済んだら魔王はいらんわっ！」

「落ち着いてください竜王様、過ぎたことを責めてもどうにもなりませんよ？」

「それは、そうじゃが…」

「ドラゴンさんの仰るとおりですわ、まずはこの状況をどうすれば打開できるのかを考えませんと。」

「むむむ…ああっもう！そんなことわかっておるわ！…光の玉とやらを見たら何故か頭に血が上ってしまって…その、チンチクリンよ、怒鳴ってしまって悪かった。」

「……」

「ルビスちゃん？」

「……ぅ……う、うう…」

急に震えだした精霊ことルビス。
腹痛でしょうか？

「…うわーんっ！どうしようっ！？ママに怒られるー！！！」

「ど、どうしたんじゃいきなり？ママってお主…世界の創造主に母親なんておるのか？」

「うぅ…ち、違うのっ！本当はアタシ…
ルビスじゃないのーっ！！！」

……。

……。

……。

『えぇーっ！？！？』

第１２歩「今更だし、面倒じゃからチンチクリンで良いじゃろ。」

「…と、驚いてみたのは良いのじゃが、そんな事は初めからわかっておったことじゃろうが…のう、ローラよ？」

「まぁ、本物の創造主を相手にちゃん付けはしませんわね。」

「えぇー！？」

何を今更、と首を傾げる竜王様と苦笑するローラ姫に対して、開いた口が塞がらない様子の精霊ルビスもどき。
いつの間にやら形勢逆転ですね。

「それでえっと…チンチクリンちゃん？」

「その呼び方はやめてっ！…本当の名前はルミナスよ。」

「今更だし、面倒じゃからチンチクリンで良いじゃろ。」

「ひどっ！？」

「自業自得でしょう？」

「ですわね。」

「うぅ…。」

嘘の代償とは中々高くつくようですね。
そんな些細なことは兎も角として、廊下が騒がしくなってきたよう

ですし、あまり悠長に事を構えている暇はなさそうですね。

【何故にいきなり空が真っ暗になったのかは不明だが、まずは王とローラ姫の安全を確保するのだ！】

【ルーカスは王の安否を確認後、そのまま護衛につけ！私はローラ姫の安否を確認する！】

【了解いたしました！…隊長。俺、この仕事を無事に終えることが出来たら、故郷の幼馴染にプロポーズしようと思ってるんです。】

【そうか…よし！じゃあ今日はお前の好きなパインサラダを作って祝福してやろう！】

…何やら、勝手に死亡フラグが立っているようですけど、気にしないことにしましょう。

「どうやらあまり猶予もないようですし…さて竜王ちゃん、ドラゴンさん。
ひとつ、お願いを聞いていただきたいのですが？」

「お願い、ですか？」

この状況でのお願いとなれば、あまり良いお願いとは思えませんが…。

「うむ、言ってみるがよい。」

「はい…えっとですね、

私とルミナスちゃんを誘拐して頂けませんか？」

…訂正、突拍子も無いお願いでした。

第１３歩「ほほーこれはなかなかの…って違うーっ！！」

「おーそうかそうか、ワシに服従する気になったのじゃな？良い心がけじゃ！」

「はいはい竜王様、妄言はお城に帰ってからにしましょうね？」

「うぅ…最近ドラゴンが冷たい……」

時と場合を考えてください。

「それは兎も角として、確かに我々はローラ姫を誘拐する目的で参りましたが、本当によろしいのですか？」

「ええ、この状況では話し合いにて皆を納得させることも難しいですし…それならいっそのこと、皆で逃げてから落ち着いて考えるのも手でございましょう？

どうやらこの現象は、ルミナスちゃんだけでどうにか出来るようでもありませんし。」

泣いているルミナスを抱きしめながら、そう言って微笑むローラ姫。

確かに、私としても竜王様からの命を達成することが出来ますし、悪い条件ではありません。

ローラ姫の表情からは考えを読むことは難しいですが、裏があるようにも思えませんしね。

「わかりました。ではさっそ…【ご無事ですか姫様！？】」

返答するよりも先に扉をブチ開けて突入してきたのは、１０名程の

兵士たち。
困りましたね、思っていたよりも兵の動きが早かったようです。
さて、この状況をどうしたものか。
とりあえずは誤魔化す方向で…

「わっはっはっ！ようやく来たか兵士ども！じゃが一足遅かったな、もうローラはワシが貰った！」

…いきなりブチ壊してくれましたよこのヘッポコ幼女は。

「何！？貴様はいったい…ってなんだ、さっきのお譲ちゃんか。」

「ん？よく見たらお主は、先ほどの門番Ａでは無いか。」

「門番Ａって…一応ソルディって名前があるんだけどね…。」

よく見れば、兵士たちの先頭に立っているのは、門のところで竜王様にチョコをくれた門番ですね。
そんなに偉そうには見えなかったのですが…

「あら、ソルディ兵士長ともお知り合いだったのですか？」

「門のところで道を教えていたいた方なのですが…兵士長だったのですか。」

「ええ、何でも『城の警備は門番から始まり門番で終わる』との家訓があるらしく、兵士長になった今でもたまに門番をされてるそうですわ。」

…裏口から忍び込むとか、そういう発想は無かったのでしょうか？

「そんなことよりも姫様！突然、空が異常な暗闇に包まれてしまいました！これはきっと悪しき者の仕業に違いありません、直ぐに避難を！」

「ええい！だから魔王はここにいると言っておるじゃろうが！」

「あっはっはっ、そうかそうか。じゃあこのキャンディを上げるから、おじさんと一緒に避難しようね？」

「ほほーこれはなかなかの…って違うーっ！！」

…さて、どうしたものでしょうか？

第１４歩「いけません竜王様っ！ここでそれを使ったら…」

この部屋の唯一の出入り口である扉の近くにいるのは、１０名程の兵士たち。
竜王様の機転（？）のお陰で険悪な雰囲気にこそなっておりませんが、突破するのは難しいですね。

「任せるんじゃドラゴン！ワシに良い考え…」

「却下」

「……」

なにやら竜王様が部屋の隅で『の』の字を書いてますが、とりあえず放っておくとして…問題はどうやってこの場面を乗り切るか、ですね。
一番簡単なのは武力での強行突破なのでしょうが、武力行使は竜王様の望むところではありませんし、何よりもローラ姫が納得しないでしょう。
ならば残す道は１つ、話術で上手くこの場を切り抜けるのみ。

「えっと、兵士長殿？これはそ…「ラリホー」」

小川のせせらぎのごとく、済んだ美しい声と共に眠りに付く兵士たち。

「……」

「さぁ、参りましょうか♪」

…清楚に微笑むローラ姫を見ていると、背筋が寒くなってくるのは何故でしょうか？
まぁ何はともあれ、後は脱出するのみですね。
「あの…竜王の城に行くのは良いけど、どうやって城まで行く気なの？」
「ふふん、ちゃんと準備は出来ておるわ！」
ようやく泣き止んだらしいルミナスの質問に、こちらもいつの間にやら復活していた竜王様が取り出したのはキメラの翼…ってまさか！？
「いけません竜王様っ！ここでそれを使ったら…」
「え…？」
竜王はキメラの翼を使った！
ひゅー…ドガッ
竜王一行は天井に頭をぶつけた。

寄り道「囚われ姫の想い」

小鳥の柔らかな声に誘われ目を覚ますと
いつもの見慣れた自室でないことに戸惑いましたが、直ぐに思い出しました。

「そういえば、私は誘拐されたのでしたね…」

辺りを見回せば、決して煌びやかでなないものの、
小奇麗に纏められた家具の一式。
窓から見える海の先、遠くに見えるのはラダトームのお城。

そう、ここはラダトームの城ではなく
魔物たちの王である、竜王ちゃんのお城なのです。

アレフガルドの皆様、おはようございます。
私はラルス１６世の娘、ローラです。
色々とありまして、今は竜王ちゃんのお城で囚われのお姫様をやっております。

何やら文句のありそうな表情をしているそこの貴方、ちょっとお城の裏庭までいらっしゃってくださいな。
平和的なお話し合いをしましょう♪

「おはようございます、ローラ姫」

身支度を整えて部屋を出ると同時に、廊下の先から歩いて来られた

殿方に呼び止められました。

「あら？おはようございます、ドラゴンさん」

この方は竜王ちゃんの側近であるドラゴンさんです。
本来は巨大な竜の姿なのですが、今は執事服をビシっと着こなした人間の姿をしていらっしゃいます。

「竜王ちゃんとルミナスちゃんは、まだお休みですか？」

「はい、どうやら夜遅くまでゲームをしていたらしく、先ほど様子を見に行ったら二人仲良く寝ていました。」

「うふふ、あのお二人らしいですわね。」

ドラゴンさんとお話をしながらお城の様子を見てみると、城内の作りはラダトームのお城とよく似ているようです。
違うところと言えば、場内を歩いているのが魔物の皆さんであるということでしょうか。

「…ローラ姫、一つお聞きしてもよろしいでしょうか？」

いつの間にやら、お城の様子を見るのに夢中になり過ぎていたようです。
振り向くと、そこには真剣な表情のドラゴンさんがいらっしゃいました。

「貴方がこの城に来たのは、竜王様とルミナスの双方を庇っての事だとは理解できます。
しかし、それだけという訳でも無いのでしょう？

貴方は…何を考えているのですか？」

恐らくは、私が竜王ちゃんに危害を加えることを警戒しているのでしょう。

口ではなんだかんだと言いつつも、やっぱりドラゴンさんも竜王ちゃんの事を慕っているのですね。

…羨ましい限りです。

果たして、姫などと言われている私のことを、ここまで純粋に心配してくれる人はどれだけいるのでしょう？

「そう…ですね。

強いて言うのなら『傍観者ではなく、当事者になりたかったから』でしょうか？」

「当事者に…ですか？」

「ええ、私たちラダトームの王族には、古よりルビス様の予言が語り継がれているのです。

『光の勇者と闇の魔王が出会うとき、選ばれし者達は新たな世界に導かれる』

…と。」

闇の魔王というのは竜王ちゃんのことで間違いは無いでしょう。

そして、ルミナスちゃんが言っていた、これから生まれるとされている勇者と竜王ちゃんが出会うとき、選ばれた者たちが新たな世界へと導かれる…。

「別に、自分が選ばれし者であるなどと驕るつもりはございません。…けれど、それでもただ見ていることが私には出来なかったのです。」

そう、これは私の我侭。
いずれ相応の殿方と結婚し、世継を生むための『人形である姫』ではなく、
ローラという名の『一人の人間』として、生きてみたいという我侭…。

「私にはその予言の真偽はわかりませんが…
当初の事情はどうであれ、竜王様やルミナスにとっての貴方は姫ではなく、ローラという一人の友人です。
その事は忘れないであげてください。」

友人…お城にいた頃にもそう言ってくれた方はいましたが、
そう言った方々が見ていたのは、姫である私であったり、お父様のこと見ているばかりでした。

いつの間にやら歩みが止まっていましたね、早く先へ行くとしましょう。
…別に、赤面した顔をドラゴンさんに見られたくなかったとかじゃありませんのですよ？

「あらあら、ドラゴンさんにとっての私は友人ではないのですか？」

「そうですね、どちらかと言うと…同志、でしょうか？」

「同志？」

「はい、貴方のルミナスへの言動や竜王様のあしらい方を見ていると、どうも親近感が沸くと言いますか…。」

「うふふ、確かにドラゴンさんとは気が合いそうですわ。」

そうこうするうちに、廊下の先から慌しい雰囲気が近づいてきます。どうやら、竜王ちゃんとルミナスちゃんが起きてきたみたいですね。

「おーこんなところにおったのか！ドラゴンとローラ！」

「ふぁー…おはよー。」

「おはようございます、竜王ちゃん、ルミナスちゃん。」

「おはようございます、直ぐに朝食の準備を致しますので…」

「ええい！そんなものは後じゃ！それよりもこのチンチクリンがなかなか面白いゲームを持ってきたのじゃが、これが難しくてな、ドラゴンとローラも協力するのじゃ！」

「だからチンチクリンって言うなー！」

さて、今日はどんな素晴しい一日が待っているのでしょうね？

第15歩「よし、今じゃ孔明っ！」

「いかんっ！勇者がライディインを唱えようとしておるぞ！？」

「アタシに任せなさい！この太陽の石を使って目をくらませれば…えい！」

「あらあら、では今のうちに勇者さんの足元に奈落の穴を設置して…勇者さんが穴にハマりましたわ♪」

「よし、今じゃ孔明っ！」

「誰が孔明ですか。この眠りの粉を使って…よし、勇者を捕獲しました。」

『やったー♪』

アレフガルドの皆さんこんにちは、ドラゴンです。
私たちが今いるのは、人間の勇者との決戦の場…ではなくて、竜王様の居城にあるテラスです。

「それにしてもチンチクリンの持ってきたこのゲームは、なかなか面白いのう。」

「当たり前でしょう？プレーヤーがモンスターとなって人間の冒険者たちと戦うだけじゃなくて、倒した冒険者たちの装備を素材にして新しい武具を作ることも出来る勇者ハンター…通称ユウハンは精霊界でも大人気なんだから！」

…そんな精霊界で大丈夫なのでしょうか？

「さて、チンチクリンよ。そろそろ現状を教えてもらおうか？」

誘拐騒ぎの一件から一夜が明けたにもかかわらず、外は相変わらず真っ暗闇のままです。
日が変われば元に戻るかと期待をしていたのですが、どうやら駄目だったようですね。

「そ、それはその…あの、だから…」

「はっきりしない奴じゃのう、男ならもっとシャキっとせんか！」

「アタシは女よっ！」

「まぁまぁ、まずはルミナスちゃん、貴方が何故ルビス様の名前を名乗っていたのか教えていただけますか？」

ローラ姫に乞われてルミナスは、ポツリ、ポツリと話を始めました。
人間たちが行っていた建国際は、建国を祝うと共に、母なる大地と創造主である精霊ルビスを敬うための祭りなのだそうです。
そして、人間たちの願いに応えるため、祭りの最後に精霊ルビスが光の玉を持って光臨し、人間たちに祝福を授ける…というのが毎年恒例になっていたそうです。
ところが、今年は精霊ルビスがどうしてもアレフガルドに来ることが出来なくなってしまったため、ルビスの娘であるルミナスが、光の玉を託されてアレフガルドへとやって来たのですが…。

「その祝福を与えるための光の玉を割ってしまった…という訳か。」
「わ、わざとじゃないのよ！？だって、手が滑っちゃったんだもん…」
「過ぎたことは今更じゃ、そんなことよりもこの暗闇をどうにかする方法はわからんのか？」
「と、とりあえず光の玉を接着剤か何かでくっつけ直せばきっと…」
「割れたと同時に、欠片は砂のように風化して消えてしまいましたね。」
「……」
「やれやれ、要するに何も解らんのじゃな？チンチクリン。」
「わ、悪かったわね！どうせアタシは何も解らないチンチクリンよ…っ……ぅ、うわーん！」
「大丈夫よルミナスちゃん、きっとなんとかする方法があるから…ね？」
泣き出してしまったルミナスを宥めるローラ姫を横目に、ため息をつく竜王様。
確かに困りましたね、何も手がかりは無しですか…
「まぁ幸いなことに、今のところの実害は空が真っ暗闇になっておるだけじゃし、時間を掛けて調べるしかないじゃろうな…」

そう呟いた竜王様への応答は、予想外のところから聞こえてきました。

「んー実はあんまり悠長に構えていられる程、余裕は無いのよねぇ…」

『！？』

第１６歩「お主とはと、とととも…だち…じゃからな」

「あらあら皆さんこんにちは、うちのルミナスちゃんがお世話になっております。オホホホホ」

「マ、ママ！？どうしてここに…」

皆が振り向いた先にいたのは…年齢は３０歳半ばくらいでしょうか？恰幅の良い体を揺らして笑っているのは、何処にでもいるような主婦のおばさんといった外見なのですが…

「えっと、ルミナスちゃんのママ…ということは、貴方が精霊ルビス様なのですか？」

「まあ！まあ！何処かで見た顔だと思ったら、貴方はラダトームのローラちゃんじゃない！いやだわー暫く見ないうちにこんなに可愛らしくなってるなんて、オバサンとってもビックリだわ！オホホホホ」

「は、はぁ…その、お陰様で元気にやっております…」

ううむ、ローラ姫がここまで困惑するとは、やはり精霊ルビスは伊達ではないということですね。

まぁ、普通は世界の創造主と言えば神にも等しき存在なのですから、それが何処にでもいるようなおばさんの姿をしてれば誰でも困惑するとは思いますが…。

「ふん！お主が精霊ルビスか？ちょうど良い、聞きたいことがあ…

「まあ！貴方があの竜王ちゃんなの！？」

っておい、いきなり何を…ふにゃ！？」

「まあ！まあ！こんなに大きく…は、なってないけど、元気そうでオバサン嬉しいわー♪
オバサンの事覚えてるかしら？」

「え、ええい！お主のことなんぞ知らんわ！そんな事よりもワシを放すのじゃー！」

「まぁ！まぁ！前にあったときの竜王ちゃんは、今のルミナスちゃんよりも小さかった時だったし、覚えて無くても仕方ないわね…でも、竜王ちゃんが元気でオバサンとっても安心したわ！これで親友だったあの子にも顔向けできるわー♪おほほほほほ」

「うー訳のわからんことを言ってないで人の話を聞けっ！」

竜王様を抱きしめて感慨に耽るオバサン…もとい精霊ルビス。
創造主と魔王ですから、過去に何かしらの因縁（とてもそうとは見えませんが…）でもあったのでしょうかね？

「そ、そんなことよりもママ！どうしてここにいるの！？どうしても外せない用事があるからしばらくはアレフガルドに来れなかったんじゃないの？」

「オホホホホ。１００年に一度の、各世界の創造主が集まって行う慰安旅行なら途中で抜け出してきたから大丈夫よ。
…慰安旅行よりも大変な事が起きちゃったようだものね。」

「うっ…」

「うむ、そのことでお主に謝らなければならんことがあるのじゃ。」
言葉に詰まるルミナスに助け舟を出したのは、意外なことに竜王様でした。
「お主がそこのチンチクリンに預けた光の玉とかいうものを、ワシが割ってしまったんじゃ。」
「えっ！？」
「あらあら…。」
「ち、違うのママ！あ、あれはアタシが…」
「チンチクリンは黙っておれ、ワシは魔王じゃ！悪いことをするのは魔王と相場が決まっておるじゃろう？
それに、お主とはと、ととも…だち…じゃからな。お主が気に病むことは無い。」
「竜王…」
「…じゃあ、光の玉を割ってしまったのは竜王ちゃんなのね？」
「うむ、そうじゃ。責任はワシが…」
「ママごめんなさい！光の玉はアタシが割りました！」
「なっ！？何を馬鹿なことを…」
「馬鹿はアンタよっ！アンタに庇われる筋合いなんてないわ！

…と、友達に罪を着せるなんて出来るわけないでしょ？」

「チンチクリン、お主…」

この城にいるのは私も含めて、全てが竜王様の家臣であり、竜王様には友と呼べる存在はいませんでした。
そんな竜王様にとって、ルミナスは初めての友達と呼べる存在だったのでしょう。
ならば、私に出来る事は１つです。

「精霊ルビスよ、光の玉が割れてしまったのは私の監督不届きです。ですから、罰を与えるのならば、私にしては頂けないでしょうか？」

「ド、ドラゴン！お主まで何を！？」

「…竜王様と、その大切な者を守るのが家臣たる私の役目です。」

「うふふ、ドラゴンさんは相変わらず竜王ちゃん命ですわね。
…ルビス様、光の玉のことは私にも責任があります。
どうか罰をお与えになるのなら私もお願いいたしますわ。」

「ローラ姫…」

いつの間にやら隣で跪いていたローラ姫。
そんな我々を静かに見守っていたルビスは、やがて表情を和らげました。

「…ルミナスちゃんは、本当に良いお友達が出来たのね。
オホホホホ、そんなに謝らなくても罰を与えるつもりはないわ。
そもそも光の玉が割れちゃったって、アレフガルドが消えてなくな

るだけですもの♪」

「な、なんじゃ、アレフガルドが消えて無くなるだけだったのか。」

「もうママったら、驚かせないでよー！」

「うふふ、そうですわね。アレフガルドが消えて無くなるだけなら…え？」

アレフガルドが、消えて無くなる？

『えええええええーーーーーっ！？』

第17歩「そ、それは…まぁその…確かに…ごにょごにょ」

「いやいやいやっ！ダメじゃろうそれ！？」

「おほほほほほ、ちょっとショッキングな内容だから軽い感じで話してみたのだけど、やっぱり駄目だったかしら？」

「当たり前じゃっ！」

「我らがヘッポコ…もとい何ちゃって幼女…もとい竜王様の突っ込みにも、このオバサンさんは動じずにオホホホと笑ってやがります。」

「…おいドラゴン、心の声が漏れておるぞ？」

おっと、私も動揺していたようです。

見ればルミナスは真っ白になって硬直してますし、ローラ姫は相変わらずの笑顔…と思ったら、口元が引きつってますね。

「コホン…精霊ルビス、どういう事か説明いただけますか？」

「そうね、まずは光の玉がどういうものか…そこから話を始めましょうか。」

私の問いかけに対して、精霊ルビスは真剣な表情へと変わり、話し始めました。

「そもそも光の玉は、この世界で作り出されたものではないの。このアレフガルドと対になる世界…その世界のとある女王が生み出

した、暗黒なる魔力を浄化するための神器…それが光の玉なのよ。」

「何故にその異世界の神器とやらが、アレフガルドにあったのじゃ？」

「光の玉がこの世界へ持ち込まれたのは、今からちょうど１０００年程昔…竜王ちゃんとは別の魔王と呼ばれる存在がいた頃のことよ。」

「その話ならばラダトームにも伝えられておりますわ。
確か…世界征服を企む魔王がルビス様を石にして、今と同じようにこの世界から光を奪い、世界を破滅させようとしたのですが、異世界からやって来た勇者によって倒されて、世界に平和が戻ったのでしたよね？」

「そうです…まったくあの陰険魔王ったら、ちょっと魔王名義で買い物して１００，０００，０００Ｇの借金を作ったり、まだ魔王が子供の頃の、オネショした写真をばら撒いたりしたくらいでグレて、純真無垢な少女だった私を石にして放置した上で世界征服をしようとするなんて！
あーもう！今思い出しても腹が立つわっ！！！！
…あら？私ったらつい熱くなってしまって、嫌だわーおほほほほほほほ。」

『……。』

歴史とは勝者が作るもの、とは良く言われたものですね。
ふと、服を引っ張られたので振り向くと、そこには泣きそうな竜王様の姿がありました。

「どうしようドラゴン、何かワシ…魔王を辞めたくなってきた。」
「ご安心ください竜王様、貴方様も似たようなものです。」
「おーそうだったのか♪
……ってどーゆー意味じゃ！？」
どういう意味って…ねぇ？
「おほほほほほ、まぁ大筋はローラちゃんが話してくれた通りよ。
そして、その勇者がこの世界に来るときに、魔王を倒すために女王より託されたのが光の玉なの。」
魔王を倒すためにもたらされた神器、それが光の玉…。
しかしそうなると、疑問が一つ沸きます。
「でもママ、今の話の通りだとすれば、光の玉って魔王を倒すためのアイテムだったんでしょ？
その神器が壊れたからって、どうしてアレフガルドが消滅するの？」
いつの間にやら復活したルミナスの言うとおり、そもそもが魔王を倒すために持ち込まれた神器が壊れたからと言って、それが世界の滅亡に繋がるものなのでしょうか？
「あールミナスちゃんそれはね、ママがそうしたのよ。」
「ママが？」
「このアレフガルドは創造主である私に何かあると、アレフガルドも異常をきたすようになってるの。

それでほら、ママって前に魔王に石にされたって言ってたでしょう？あの時は魔王も世界を消滅させる気までは無かったから、光が奪われただけで済んだけど、次に何かあったときにもそれで済むとは限らないわ。
だから、この世界の命を司る力を光の玉に吹き込んだの。
こうすれば、ママに何かがあっても光の玉さえ無事ならアレフガルドは大丈夫だし、ママも一年中アレフガルドにいなくてもよくなるから。
それに、あの頃は新婚時代でちょうどルミナスちゃんも生まれたばっかりだったし…そういえば、あの頃のルミナスちゃんはオネショばっかりしてたけど、もう直ったかしら？」

「い、いつの話をしてるのよ！？お、おねしょなんてもうする訳ないでしょっ！！」

そういえば、ここに城を構えた頃の竜王様も…っと、何やら殺気を感じたのでこの話はやめておきましょう。

「…というか、創造主なのに結婚とかするのか普通？」

「まあ！まあ！それは差別よ竜王ちゃん！創造主が結婚をしたらいけないなんて決まりはないし…竜王ちゃんだって、いずれは好きな人と一緒になって子供が欲しいでしょう？」

「そ、それは…まぁその…確かに…ごにょごにょ」

何やら顔を赤くした竜王様がこちらをチラチラと見ていますが…やっぱり風邪でしょうか？

「それでえーっと、何処まで話したかしら？

…そうそう、光の玉に命の力を吹き込んだところまでだったわね。
本来なら年に一度のお祭りで、光の玉の力を使って世界に命の力を行き渡らせていたのだけど…今年はそれが出来なかったのよね。」

「その…生命の力がないと、アレフガルドはどうなるのですの？」

ローラ姫の問いに対する応えは、非情なものでした…

「文字通り、世界から命の力が無くなっていくわ。
まずは草木が枯れることから始まって、やがては海も干上がり…そして最後は、この大地が無になるでしょうね。」

「そ、それってママ…」

「ええ…

後1年で、この世界は消滅するわ。」

第１８歩「え？おばさんには無理よ？」

『……』

空の暗闇が皆の心の中に入ってきたかと錯覚するような、重い沈黙が辺りを支配しています。

…かと思いきや、

「…さて、チンチクリンよ。今度は何を狩ろうかの？」

「そうねー…あ、でもやっと勇者から素材をゲット出来たんだから、まずは新しい武具を作りましょ♪」

「む、それもそうじゃな。」

何事も無かったかのようにゲームを始めるお子様たち。

人はそれを現実逃避と呼びます。

「あの、ドラゴンさん？」

神妙な表情で声を掛けてきたのはローラ姫。

流石は一国の姫君だけあって、こんな状況でも冷静に…

「私も欲しい素材があるのですが、ひと狩り付き合っていただけませんか？」

ダメダメでした。

「皆で楽しそうね、おほほほほ」

「いやあの…どうにかして世界を救う方法は無いのですか？」

「もちろん、ありますよ？」

そんな光景を呑気に微笑みながら見てるおばさん…もといルビスに聞いてみましたが、
やはりそう簡単に方法は見つからな……？

『あるのっ！？』

思わず、ファンタジーな世界から帰ってきた3人と異口同音でツッコミを入れてしまいましたが、
考えてみれば、ここにいるのは世界の創造主たる精霊ルビスです。
当然、ここに来たのだって世界を救うためであって、遊びに来た訳ではないでしょう。

たぶん。

「おほほほほ、昔の偉人が言っていたでしょう？【パンがないならお菓子を食べれば良い、壊れてしまったのなら新しく作り直せば良い】って。」

「何処のアントワネットじゃそれは…ってお主、光の玉を作ること

が出来るのか！？」

「え？おばさんには無理よ？」

「……ドラゴンよ、ちょっと人間の町を2，3個破壊してきてもいいか？」

一見すると涙目でプルプル震えてる幼女という、一部のマニアには生唾ものの光景なのでしょうが、
その身に秘めている力を知っている者としては、洒落にならないので困ります。

「ちょ、ちょっと落ち着きなさいよ！
ママもイジワルしないでちゃんと説明して！」

「おほほほほほ、ごめんなさいね？
竜王ちゃんを見てるとついイジメたくなっちゃって。」

「よく解ります。」

「ええ、同感ですわ。」

「そこの2人も共感するなっ！」

おっと、つい本音が出てしまいました。
これ以上は竜王様が泣いてしまいそうなので、そろそろ話を戻すとしましょう。

「ゴホン…精霊ルビスでも作れないこの光の玉を、作る事が出来る者などいるのですか？」

「おほほほほ、光の玉はもともと異世界で生み出されたものだから、このアレフガルドで同じものを作ることが出来る者はたぶんいないわ。
でも、光の玉が生み出された世界になら、可能な者がいる筈よ。」
なるほど、確かに光の玉が生み出された世界になら、もう一度作ることが出来る者がいてもおかしくはありませんね。
「でもママ、異世界でなら光の玉が見つかるとしても、どうやって行けばいいの？」
「おほほほほ、異世界に行くには４つの力をあわせる必要があるのよ。」
「４つの力？」
「ええ、まず一つ目が精霊の加護。」
「精霊…ってことは、ママやアタシの力が必要ってこと？」
首を傾げるルミナスに、微笑みながら頷いてみせるルビス。
「そうね、そして２つ目が闇の力。」
「ふむ、闇の力なら魔王であるワシの出番じゃな！」
いつの間にやら復活した竜王様が元気に挙手をしました。
「そして３つ目が、人を束ねる証。」

「人を束ねる…つまりは王族の血筋の者と言うことですわね。
なら私が協力できそうですわ。」

そう言って、いつもの笑顔を見せるローラ姫。

「そして最後の1つ…異世界の血筋。」

「異世界の血筋？」

全員が首を傾げる中、ルビスは静か語りました。

「そう、古に光の玉と共にこの世界に来て、魔王を倒した者の末裔
…つまり、

勇者よ。」

第１９歩「これは…これが恋の痛みというものなのですね。」

「その昔、魔王を倒して世界に光と平和をもたらした勇者…その血筋は今なお受け継がれているの。
世界が破滅の危機に陥った時に、勇者として覚醒するために…。」

そう…

それはルビスと勇者…そして魔王との間で取り交わされた”約束”

どくん

…不意に、胸を締め付けられるような痛みが走りました。

何か大切な事を忘れてしまっているかのような…

私は誰なのだ？

私は…

ワタシハ…

ワレハ…

「……っ……ら……ど…ドラゴン！」

心の奥底へと沈んでいた私の意識を拾い上げたのは、一人の少女の呼ぶ声でした。

「どうしたんじゃドラゴン、顔が真っ青だぞ？」

少女…？
いえ、この方は私の主…

「…竜王様？」

「なんじゃ？何処か痛いところでもあるのか？
…も、もしかして、昨日のキメラの翼を使った時に、天井へぶつけた頭の傷が悪化したのか！？」

目の前で私の身を案じてくれているのは、我が主にして魔王である竜王様。

周囲には、心配そうにこちらを見ているローラ姫とルミナス…そして、紅茶のお替りが欲しそうな目でこちらを見ているルビスの姿があります。
…そうでした、皆で空を覆う暗闇について、ルビスから話を聞いていたのでしたね。

「ド、ドラゴン…やっぱり頭か？頭なのか？」

「いえ、頭ではなく胸に痛みが……？」

はてさて、私は何をしてたのでしょうか？
つい先程まで、何か考え事をしていた気がするのですが…うーん？

「胸！？何か変な物でも拾い食いしたのか？」

「竜王様じゃないんですから、そんなことしませんよ。
あれはもっと感傷的な…ああ、そうでした。」

そういえば、ずいぶん前にこういった胸の痛みが何なのか、教えてくださった方がいましたね。
そう、確かこれは…

「これは…これが恋の痛みというものなのですね。」

「えええええええっ！？ど、どどどどうしたのじゃいきなり！？
い、いや、ワシもその痛みについては身に覚えが無いわけではないのだが…そ、そういう話は二人きりのときに出来ればその、ムードとかも大事にしてだな…。」

何やら頭から煙を出しながら挙動不審になる竜王様。

ふむ、いまいちこの”恋の痛み”とやらの意味がわからなかったのですが、竜王様も身に覚えがあるということは…食べ過ぎたときの胸焼けとか、きっとそんな感じの意味合いなんでしょうね。

「竜王様のお陰でよく解りました。
これからは、食べ過ぎには十分に注意いたします。」

「う、うむ！これから食べ過ぎには注意して…ってどういう意味じゃそれは！？」

「まぁまぁ、ドラゴンさんが大事無いようで何よりですわ。
それで、勇者さんのことですけど…どのようにして探し出せばよいのでしょうか？」

「おほほほほ、別にこちらから探しに行く必要は無いわ。
勇者とは人々の希望を背負う存在なの。だから今のアレフガルドの状況を考えれば、直ぐに噂の一つでも挙がる筈よ。」

そういえば、以前に竜王様が話していた【せかいせいふくけいかく】でも、いずれ勇者が現れると言ってましたね。
魔王と勇者…互いの運命に惹かれ合う、といったところでしょうか？

「じゃあ、勇者の噂を元に探し出して、協力させれば良いのね？」

「おほほほほ、それだけじゃダメなのよルミナスちゃん。
勇者っていうのは、血筋だけでなれるものじゃないの。
数々の困難な試練を乗り越えて、心身ともに成長した者が初めてそう名乗ることが出来るものなの。
だから、今の勇者はまだ勇者では無いわ。強いて言うなら…」

「言うなら？」

「今はまだ、思春期真っ盛りの高校生と言ったところかしら？」

……えー

第２０歩「ふむ…つまりは、まだまだ成長前のひよっこという訳じゃな。」

「…なんじゃ、そのこーこーせーというのは？」

「おほほほほほ、高校生とは異世界の学生のことよ。
ちょうど大人でも子供でもないお年頃…といったところかしら？」

「ふむ…つまりは、まだまだ成長前のひよっこという訳じゃな。」

精霊ルビスの説明に、神妙な顔で頷いている竜王様。
こんなちびっこ…もとい、魔王にひよっこと呼ばれていることを勇者が知ったら、どう思うのでしょうね？

「まぁそんな訳だから、まずはこの時代の勇者が一人前になれるように協力してあげて欲しいのよ。
さて、おばさんはそろそろ慰安旅行に戻らないといけないから、後はよろしくね。
おほほほほほほ～」

「あ、ちょっとママ！？」

そう言ってルビスはティーカップを持ったまま、あっという間に消えてしまいました。
…高かったんですけどね、あのティーカップ。

「まったく、アレフガルドの一大事じゃと言うのにルビスの奴は…」

「きっとルビス様にも、何かお考えがあるのですわ。
それよりもまずは、今後の事をどうするか考えるために、状況を整

理しませんか？」

ローラ姫の提案に対して一人ずつ、今解っていることを話していくことにしました。

「まずはアレフガルドの現在の状況じゃな。
今は空を暗闇が覆っているだけだが、このままではいずれ世界は消えてしまうのじゃ！」

「そして、世界を救うには異世界へ行って光の玉を見つけ出さなければならないのでしたね。」

「ママの話だと、異世界に行くには精霊の力、魔王の力、人間の王族の力…そして、勇者の力が必要なのよね。」

「ええ、皆さんがおっしゃってくださいました3点が今解っていることです。
そして問題が1つ、勇者さんを一人前にしなくてはいけないとの事でしたが…具体的にどうすれば一人前だと認められるのか、と言うことですわね。」

確かに、勇者と言うからにはただ力をつければ良いという訳でもないのでしょう。
何か明確な条件でもあれば良いのですが…。

「うーむ、ゲームならばＬＶを規定まで上げたりとか、特定のアイテムをげっとすれば良いとか、条件は決まっているんじゃがなぁ…」

「あんたねぇ、それはゲームだからで…アイテム？
…あっ！それよっ！！」

皆が黙り込んでしまっていた中、竜王様の呟きに反応したルミナスが、突然大声を上げて立ち上がりました。

「前にママが、魔王を倒した勇者が身に着けていた武具が今もこの世界の何処かにあるって言ってたの！
だから、その伝説の武具を見つけ出して、身に纏うことが出来たのなら勇者として認められるんじゃない？」

「なるほど、確かに伝説の武具ならば、勇者の証としてこれ以上のものはないですわね。」

「でかしたぞチンチクリン！ではさっそく…」

ルミナスの提案にやっと希望が見えてきた時、その知らせはやってきました。

「た、大変ですっ！人間たちの軍団がこの城に向かってきていますっ！」

第２１歩「って、おいこら！お主ら人の話を聞けっ！」

「た、大変ですっ！人間たちの軍団がこの城に向かってきていますっ！」

その知らせを持ってきたのは、人間たちの動向を探るために送り出した配下の者…ドラキーでした。

「ちょ、ちょっと！それってどういうことなのよ！？」

「どうもこうも…姫を誘拐したんじゃから、捜索隊が組まれるのは当然じゃろうが。」

慌てるルミナスとは対照的に、竜王様は特に動じた様子もなくお茶お飲んでおります。

確かに予測していた事とはいえ、現在の状況から考えれば少々面倒ですね。

当初の予定では、勇者が現れるまで人間たちの軍隊を適当に蹴散らすつもりでした。

しかしながら、そんな事をすれば最悪の場合、今は友好的であるローラ姫との関係に亀裂が入る可能性が高いでしょう。

異世界へ行くための条件を考えれば、絶対にそれは避けなければなりません。

かと言って、話し合いで解決しようにもローラ姫を誘拐したことは事実ですから、例えローラ姫に説得をしてもらったとしても、理解を得ることは難しいでしょうね。

最悪の場合、ローラ姫を脅しているとか操っている等と誤解を受ける場合もあります。

私が悩んでいるのに気づいたのか、竜王様は不敵な笑みを浮かべて

胸を張りました。
「悩む必要は無いぞドラゴンよ、当初の予定がちょっと早まるだけじゃ！」
「予定、ですか？」
「うむ、当初は勇者の後に行うつもりじゃったが問題は無い。人間の軍隊なんぞワシのこのあだるとな魅力でメロメロに…」
「ローラ姫、紅茶のお替りは如何ですか？」
「ありがとうございますドラゴンさん、頂きますわ。」
「って、おいこら！お主ら人の話を聞けっ！」
ジタバタと暴れる幼女のことは放置しておくとして、本当にどうしたものでしょうねぇ…。
「でも確かに、竜王ちゃんのおっしゃる通り、そんなに気にしなくても大丈夫だと思いますわ。」
そう言って微笑んだのは、今の状況を一番心配している筈のローラ姫でした。
「で、でもローラ…このままだと人間のと魔物の全面戦争になっちゃうかもしれないのよ？」
「うふふ、大丈夫ですわルミナスちゃん。そろそろ何らかの新しい知らせが…」

「た、大変ですっ！」

ローラ姫の言葉が終わらぬうちに飛び込んできたのは、ドラキーと同じく人間たちの動向を調べさせていたゴーストでした。

「今度は何があったんじゃ？」

「そ、それが…」

皆の視線が集まる中、ゴーストは何故か困惑した様子で話し始めました。

「…昨日未明にラダトーム城を出立した人間の軍団が先ほど…壊走を始めました。」

『……は？』

その報告に、ローラ姫を除いた全員の目が点となりました。

第22歩「まさかお主等…ワシの【めいれい】を破って、人間に手を出したのじゃ！」

「ちょ、ちょっとアンタたち！一体何をしたのよ！？」

「そ、それを聞きたいのはワシらの方じゃ！」

疑いの視線をこちらに向けるルミナスも、動揺する竜王様も仕方が無い状況と言えるでしょう。
規模は解りませんが自国の姫君を捜索する為の隊ともなれば、小規模である筈はありません。
そんな部隊を僅かな時間で壊走に追い込むことが出来る者は限られてきますし、確かに竜王様にはそれだけの力があります。
しかしながら、つい先ほど知らされたばかりの軍隊をどうにかするのは、いくら竜王様と言っても不可能でしょう。

そうなれば、考えられるのは1つだけ…

「一体何をしたのですか、ローラ姫？」

そう、この場で唯一取り乱していないどころか、まるでこうなる事を予測していたような言動をしていたローラ姫。
この腹黒…もとい、人間たちの姫君であるこの方なら、どうにかする事も可能なのではないでしょうか？
…と、思ったのですが。

「うふふ、私は何もしておりませんわ。
ただ、こうなるのではないかとは予想しておりましたけど。」

「どういうこと？」

いつも通りの笑顔を崩さぬローラ姫の答えは、皆をより困惑させるものでした。
しかし、こうなる事を予想していたとはどういう事なんでしょう？
それではまるで、捜索隊は自滅したとしか…。

「ゴーストさん、捜索隊はどうして引き上げてしまったのでしょうか？」

「そ、それは…」

ローラ姫の問いかけに対して、何故かゴーストは困惑の表情のまま言葉を詰まらせています。
そんなゴーストの表情を見て、竜王様の表情が険しくなりました。

「まさかお主等…ワシの【めいれい】を破って、人間に手を出したのではあるまいな？」

我々魔物は竜王様の命令により、自衛以外で人間を傷つけることを硬く禁じられています。
これは無闇な殺生を好まない竜王様らしい命令ではありましたが、当然ながら不満を抱く魔物たちもいました。
しかし、そこは実力至上主義の魔物社会らしく、竜王様や私の【平和的な話し合い】によって、今では全ての魔物が友好的とまではいかないものの、いきなり人間たちに襲い掛かるようなことはしない筈だったのですが…。

「め、滅相もございやせん！オイラたちは何もしてませんよっ！」

慌てた様子で喋り始めたゴーストの話の内容は、皆を驚愕させるも

のでした。

「人間たちの軍隊は…

夜営中に食べた野生の毒キノコでお腹を壊して、ラダトームに帰っていきやした。」

『……は？』

…毒キノコ？

「…い、いやまて！毒キノコってそんな…何かの間違いじゃないのか？」

「間違いじゃありやせんよ！そのキノコには毒があるから食べちゃダメだって忠告したんですけど、人間の軍隊の隊長さんが…

「こんなに綺麗な色のキノコに毒なんてある筈は無い！」

って、聞いてくれなくて…結局、殆どの人間が物凄い形相で、トイレトイレって叫びながらラダトームに帰って行っちゃいやした。

あ、お腹を壊さなかった人間たちも、昨日やってたキャンプファイヤーの後片付けをやった後、皆で帰って行きやしたよ。」

「え…えーっと、それってつまり…」

「自滅ですわね。

アレフガルドはこの数百年の間、一度も争い事なんてありませんでしたし…実戦経験の無い騎士団なんてこんなものですわ。」

『……』

今日だけで何度目か解らない、痛々しい沈黙が辺りを支配しました。

寄り道「小さな絆」

どうしてこんな所にいるんだろう？

そこは、魔の居城…

どうしてこんなことになってしまったのだろう？

それは、果て無き闇が支配する世界…

どうして…

そこにいるのはアタシだけ

…お……え……

誰かの声が聞こえる

…お…ま…え…が…

誰かの…違う、これはこの世界から湧き上がる憎悪

おま…えがっ！

暗闇の中から、無数の手が伸びてくる

世界を闇に閉ざしたっ！！

アタシは必死に逃げたけど、直ぐに捕まってしまった

全ての生きるものの命を奪ったっ！！！

捕らえられた無数の手によって、アタシは闇の中へと引きずり込まれていく…

嫌…違う、違うのっ！

違わない…お前が世界を壊した！

こんな事になるなんて知らなかったの！

関係ない…お前が全ての生き物を殺した！

ごめんなさい！

許さない…お前にも同じ痛みを！苦しみを！

ごめんなさい！ごめんなさい！ごめんなさい！ごめんなさい！

許さない！許さない！許さない！許さない！

そして、アタシは闇へと引きずり込まれた…

「…っ…いやぁぁぁぁぁぁぁっ！！！！！！！！！」

「ごるばちょふっ？！」

がむしゃらに動かしていた手に柔らかい衝撃が走ると共に、アタシ

は目を覚ました。
慌てて辺りを見回すと、そこは闇の中…ではなく、ぬいぐるみやマンガ、それにゲームが所狭しと置かれた子供部屋だった。

「い、いきなり何をするんじゃ！？」

そして、何故か涙目になっている竜王が、赤くなった頬を押さえながらこちらを睨んでいる。
そういえば、話し合いがひと段落して解散になった後、竜王の部屋で一緒にゲームをしてたんだけど…いつの間にか寝ちゃったのね。

「おいチンチクリン！聞いておるのか…って、どうしたのじゃ？」

「べ、別に何でもないわよ！」

…どうやらアタシも泣いていたみたい。
竜王に気づかれて馬鹿にされないうちに、慌てて涙を拭いたけど…バレれてないよね？

「ふん、どうせホームシックにでもなって、ピーピー泣いておったのだろう？」

「ち、違うわよ！そんな事で泣くわけないでしょ？ヘッポコ魔王と一緒にしないでよね！」

「むかっ！どうやらまた格ゲーでぼこぼこにされたいらしいのう？」

「アタシだってあれからいっぱい練習したんだから、ぼこぼこにされるのはアンタの方よ！」

「良い度胸じゃ！ならば今一度、魔王の力を見せてやる！」

「望むところよ！返り討ちにしてやるわ！」

本当はもっと違う言葉をかけたいのに、何故かコイツの前だと思っていることとはまったく違うことが口から出ちゃう。
こういうのを、売り言葉に買い言葉って言うんだろうなぁ…。

アタシの名前はルミナス。
この世界の創造主である精霊ルビスの娘よ。
そして、目の前で鼻息荒くゲームをしてるのが、この世界の魔王である竜王。
何でアタシが魔王とゲームをしているのかというと…まあ、いろいろあって世界を救うために共闘をしてるのだ。

そう…この世界は今、滅亡の危機にあるのだ。

アタシのせいだ。

アタシが光の玉を割ってしまったから…

夢に出てきたあの暗闇、あの無数の手はきっと…

「…お主のせいではない。」

「っ！？」

ふいに聞こえたその言葉に慌てて振り向いたけど、竜王は相変わらずゲームと睨めっこしたままだった。
だからきっと今のは空耳…ではなかった。

「光の玉が割れてしまったのは事故じゃ。
だからチンチクリンが気病む必要は無い。」

「……っ、違う！あれはアタシが割ったんだからアタシが悪いの！
アタシのせいで世界が…皆が…ぅ…うぅ…っ…ア、アンタだって本当はそう思ってるんでしょ！？」

…アタシは最低だ。
慰めてくれたのに。
心配してくれたのに。
アタシは八つ当たりをしてる…っ

夢で見た無数の手に絡み取られるような…そんな感覚がアタシを支配していく…

「やれやれ…ルミナスよ、お主は肝心なことを忘れておるぞ。」

「肝心なこと…？」

「うむ、それはな…世界はまだ消えておらんということじゃ！
世界を救う手立てもルビスから教えてもらったじゃろう？」

「確かにそうだけど、でも…」

「ええいデモもにゃんこも無い！
ローラもいるし、ドラゴンもいる。ルビスだってお主のことをちゃんと思っている筈じゃ。
それに…ワシがおる！魔王であるワシに不可能なことなどない！
だから大丈夫じゃ、お主は一人ではないのだから。」

アタシは一人じゃない
その言葉に
アタシを掴んでいた無数の手は、消えてなくなった。

「あとだな…もしお主を傷つけるような事を言う輩がいたとしても、大丈夫じゃ。
…と、ともだちを傷つけるような輩はこのワシがぶっ飛ばしてやるっ！」

「竜王……あ、勝った。」

「ちょおおっ！？人が真面目な話をしてるときに不意打ちとは卑怯だぞ！？」

「へーんだ！勝ちは勝ちでしょ！」

「うるさい！今のは無しぢゃ！やり直しぢゃ！」

「何度でもやっても結果は同じよ♪

…ねえ、竜王」

「なんじゃ？」

「……ありがとう。」

「……ふ、ふん！泣いて謝るなら今のうちだぞ、チンチクリン！」

「望むところよヘッポコ魔王！」

結局、その日のゲームは決着が付かずにいつの間にか寝ちゃったんだけど、もうあの夢を見ることは無かった。

まずはアタシに出来るとこを精一杯やってみよう。

きっとなんとかる！

だってアタシは一人じゃない

アタシを信じてくれる友達が一緒なんだから！

第２３歩「なっ！？お、お前たちは…」

「つまり今ワシらがすべきことは、勇者についての噂が立っていないか調べることじゃ！」

ローラ姫捜索隊の壊滅から一夜が明けた昼下がり…
昼食の席でそう切り出したのは、竜王様でした。

「確かに、捜索隊が残念なことになってしまったのはラダトームにも伝わっているでしょうし、そろそろ勇者さんへ白羽の矢が立っているかもしれませんわね。」

同意したローラ姫の言葉に頷く一同。
まあ壊滅の理由からして、もう一度捜索隊を出す可能性も少ないでしょうし、そうなれば勇者が出てくるのもそう遠くは無いでしょう。

「うむ、問題は何処で噂の調査をするかじゃが…
やはり、一番大きな町…ラダトームかのう？」

「でもでも、あれだけ大きな町に勇者が住んでれば前もって噂になってるんじゃない？
今まで噂が上がった事がなかったってことは、勇者はお城からは離れたところにいるんじゃないかな？」

「むぅ…確かにそうじゃな。」

ルミナスの反論に対して、あっさりと納得する竜王様。
てっきりまた喧嘩になるかと思いましたが…いつの間に仲良くなったんでしょうね？

人の多い城下町で調査をするか、それとも城から離れた村や町にするのか、もしくは皆でバラバラに分かれるか…方針が決まらぬまま中断させたのは、城の外から聞こえてきた声でした。

「すみませーん、何方かいらっしゃいませんかー？」

「なんじゃ、客か？」

「私が見て参ります。」

不思議そうに首を傾げる竜王様に応え、私は席を立ちました。
竜王様が不思議がるのも無理はありません。配下の魔物であれば城の外から声を掛けることなどありえませんし、ひきこもりである竜王様を尋ねてくる者など殆どいません。
ならば招くかれざるお客様でしょうか？
警戒しつつ、扉を開けた先にいたのは…

「貴方たちは…」

「おお、戻ったかドラゴン。」

「はい、竜王様へのお客様でしたので、連れて参りました。」

「ワシの客だと？」

そう言って、私の後ろにいた【お客様】の顔を見た竜王様の表情が、

恐怖と驚きの色に染まりました。

「なっ！？お、お前たちは…」

第２４歩「恋する乙女のパワーです！」

「なっ！？お、お前たちは…」

竜王様が恐怖と驚きの表情で見つめる先にいるのは…

「やっほー竜王ちゃん、久しぶり～♪」

「久しぶりと言っても…一昨日会ったばかりですけどね。」

「お主らはラダトームの城におったメイドその１・２・３ではないか！」

そう…訪ねてきたのは、ローラ姫を誘拐するためにラダトーム城へ行った時に出会った、メイド少女たちでした。

「メイドその１って酷いですー、わたしにはランって名前があるんですよー？」

「リンです！」

「…ルン」

「ええい、名前など聞いておらん！何しに来たんじゃ！？」

マイペースなメイド娘たちに対して、敵対心剥き出しの竜王様。
まあ、あの時の竜王様は完全に着せ替え人形のごとく、おもちゃにされてましたし…トラウマにでもなってるんでしょうかね？

「何ってー、約束したじゃないですかー？」

「お城で会った時に汚しちゃったお洋服を持ってきたんです！」

「あと…ローラ姫に頼まれていた着替えとかその他もろもろ、お泊りセットを持ってきました。」

「あらあら、ありがとうございます。
助かりましたわ。」

どうでも良い事ですが、この城は周りを海に囲まれた孤島に立っており、さらに城の周囲には毒の沼まで用意していますから、普通の人間が簡単に近づくことは出来ない筈なんですけど…このメイド娘たちはどうやって来たんでしょうね？

「えっと…それはですねー？」

「恋する乙女のパワーです！」

「私たちメイド小隊の前には、物理法則など無駄無駄無駄ー…です。」

……どうやら、警備体制の見直しが必要なようです。

第２５歩「…ガンコオヤジ」

アレフガルドの皆さんこんにちは、ドラゴンです。

突然ですがこのアレフガルドは現在、世界滅亡の危機に陥っております。

そんな中、我々が何をしているかと言うと…

「やっぱり竜王ちゃんは何を着ても可愛いですー！もうお持ち帰りしたい気分ですねー♪」

「スカートとハイソックスの間から見える生フトモモ…完璧な絶対領域です。」

「ねえねえ竜王ちゃん、今度はこっちのワンピースを着てみましょ？」

「だから人の服を脱がそうとするなと…にゅあ！？し、下着の中に手を入れるでない！」

またまた竜王様が大人気です。

「うぅ、大切な何かを汚された気がする…」

いつの間にやら恒例になったらしい着せ替えタイム（何故かローラ姫やルミナスも嬉々として参加）の終了と共に、脱力する竜王様。

「汚されただなんてそんなー、とっても似合ってますよー？」

「…ないすえろす、です。」

「お兄さんも可愛いと思いますよね！？」

メイド3人娘に促され、改めて竜王様の格好を見てみたのですが…。丸い尻尾の飾りを付けたレオタードに網タイツ、そして頭にはウサギの耳をかたどったヘアバンドを付けたそのお姿は…

「…バニーガールですね。」

「う…そ、そんなにじっと見られると…その、あの……ごにょごにょ」

何故か顔を赤くして俯いてしまった竜王様も心配ですが、それよりもこの服装は…

「確かによく似合ってらっしゃいますが、ヘソ出しというのはあまり良いとは思えませんね。」

「あらー、ちょっと露出が多かったでしょうかー？」

「お兄さんは意外と古風な考え方ですね！」

「…ガンコオヤジ」

「い、いや…ドラゴンがこう言った服装が好みでは無いのならワシはやめておくが…」

「いえ、好みがどうとかではなく…そんな格好でお昼寝をしたら、お腹が冷えてしまいますよ？」

『……』

何故か皆さん黙り込んでしまいましたが、何かおかしなことを言ったでしょうか？

第２６歩「…勇者のたまご」

「街の様子ですかー？
そうですねぇ…いつも通りでしたよー？」

空が暗闇に覆われた事から始まり、ローラ姫の誘拐や捜索隊の撤退など、ここ数日で起きた事件で街は大混乱…かと思いきや、メイド少女たちの話は意外なものでした。

「まあ、まったく混乱が無かった訳でもないですけどねー。
騎士団の一部の方が暴走したりとかー？」

「そうなんです！ローラ姫が誘拐されたときに王様は、誘拐犯から要求が来るまでは事件を内密にして、勝手に動かないようにって言ってたのに、功を焦った近衛騎士団の団長が兵を煽って勝手に捜索隊を結成しちゃったんです！」

「…でも直ぐに帰ってきたけど。」

そういえば、あの時は逃げることに必死で、俗に言う犯行声明というものまで気が回ってませんでしたね。
まぁあの場で竜王様に大々的に名乗ってもらったとしても、貰ったお菓子の数が増える程度の違いしかなかったでしょうけど。

「でも、騎士団の方々が暴走したせいで街の人にローラ姫の誘拐がバレちゃったんですよねー？」

「だから王様は皆を安心させるために演説をしたんです！ローラ姫とこの世界に光を取り戻すために、勇者を旅立たせるって！」

「…略して勇者に丸投げ作戦。」

「なに！？勇者じゃと！？」

勇者

その言葉にいち早く反応したのは竜王様でした。

「えっと、正確には勇者の血を引く者ですねー？」

「はい！ずっと昔にこの世界を征服しようとした魔王を退治した勇者の子孫だそうです！」

「…勇者のたまご。」

「なるほどのう、ルビスの言った通りじゃな。」

ここまでは予定通りと言ったところでしょうか。

後は勇者と合流して話し合うしかないのですが…勇者の行方に関しては、昨日のドラキーたちに人間の町の様子を探らせているので、しばらくすれば報告が来ることでしょう。

「た、大変です竜王様！人間たちに動きがありましたっ！」

どうやらタイミング良く報告が来たようです。

慌てた様子で駆け込んで来たのは、昨日のゴーストでした。

「うむ、話はこちらでも聞いた。

人間の勇者が現れたのじゃろう？」

「は、はい」

「それで、勇者は今何処にいるんじゃ？」

「そ、それが…その」

竜王様の問いかけに対して、何故かゴーストは困惑の表情のまま言葉を詰まらせています。
はて、このやり取りは最近あったような…嫌な予感がするのは何故でしょう？

「なんじゃ、もしかして見失ったのか？」

「い、いえ！ちゃんと居場所は把握してます！」

慌てた様子で喋り始めたゴーストの話の内容は、皆を驚愕させるものでした。

「勇者は人間の王に謁見した後、城を出て1歩目で遭遇したスライムに戦いを挑んだのですが…
あっさりボコボコにされて自宅にヒキコモリました！」

『……』

これなんてデジャブ？

第27歩「そうですわね…勇者さんの首に懸賞金を掛けてみてはどうでしょう？」

「やれやれ、また人間たちの街に来ることになるとはのう…」

ため息と共に呟いた竜王様の独り言は、あっさりと街の喧騒にかき消されました。
建国祭を行っていた頃よりは人通りは少ないものの、城下街であるこのラダトームは今日も行き交う人々の喧騒がそこかしこで聞こえてきます。

「まぁまぁ竜王ちゃん、これも世界を救うためですわ。」

「そうれはそうじゃが…」

フード付きのローブで顔を隠したローラ姫の言葉に、しぶしぶと言った表情で頷く竜王様。
我々が再びこのラダトーム城にやって来たのは、世界を滅亡の危機から救うための最後の鍵…

「まったく…さっさと勇者を部屋から引きずり出すぞ！」

そう、ヒキコモリになった勇者を更正させるためにやって来たのです。

「どうやらここのようですわね。」

メイド娘たちから聞いた話を元に街の人間に聞き込みをした結果、勇者の家は思ってたより簡単に見つかりました。
ちなみに、当のメイド娘たちはラダトームには帰らずにこのまま竜王様の城でローラ姫の世話をするとの事でしたので、城で留守番をして貰っています。
まぁ、何故かメイド娘たちの居候を竜王様が断固として反対していたのは些細な事（多数決の結果、反対票1票のみで否決）として…
街の土地勘があるローラ姫に先導されてやって来た先にあったのは、何処にでもある一軒家でした。

「それで、どうやって勇者を家から引っ張り出すの？」

「任せろ！ワシに考えがあ…」

『却下』

「……ｏｒｚ」

3人同時に却下されて凹んでいる幼女は気にしないことにして、どうしたものでしょうね？

「そうですわね…勇者さんの首に懸賞金を掛けてみてはどうでしょう？」

「そんな遠巻きな事なんてしなくても家に火をつければ出てくるんじゃない？」

「いや、だからここはワシのぐれいとな作戦をだな…」

…世界を救う前に、まずはこの人たちを何とかした方が良い気がするのは気のせいでしょうか？

第２８歩「ええい、さっさと退かんかっ！ベギラマっ！！！」

「うーむ…仕方が無い、面白みには欠けるがドラゴンの案を採用するとしようかの。」

「ありがとうございます」

どうすれば勇者に会うことが出来るかを話し合うこと３０分、やっと方針が決まりました。
作戦は、人間の王様の命令で勇者の様子を見に来た使者のフリをするという、至って簡単なものです。
はたしてこのメンバーを見て使者と思ってくれるかは疑問ですが…
まぁ、放火したり勇者に濡れ衣を着せるよりはマシでしょう。

「ではさっそく…ふぎゃ！？」

ノックをしようと竜王様が玄関の前まで来た瞬間、タイミングを見計らったかのように玄関の扉が開き、家の中から飛んできた物体の下敷きになりました。

「まったく、なにがスライム怖いぃだいっ！ふざけたことを言ってないで、さっさと姫様と世界を救ってきなっ！」

おそらくは竜王様にぶつかった物体を投げ飛ばしたのであろう女性は、物凄い迫力で怒鳴り散らすと乱暴に扉を閉めました。

「ま、待ってよ母さん！ぼ、ボクには勇者なんて無理なんだって！母さんだってボクが近所のノラ犬にも勝てないの知ってるだろ！？」

竜王様の上に乗ったままの物体が、慌てて何やら扉に向かって叫んでいますが、どうやら先程の女性は聞く耳を持たないようですね。

「あら、貴方は…」

そんな物体…もとい、青年というよりは少年と言う言葉の方が似合うであろう人影は、驚いた表情で言葉を漏らしたローラ姫の声で、やっと我々に気づいたようです。

「え、えっと…あの、貴方たちは…ってローラ姫！？」

困惑の表情で辺りを見回した少年が、ローラ姫を見て驚愕した瞬間…

「ええい、さっさと退かんかっ！ベギラマっ！！！」

「へっ…ぎゃあああああああっ！！！！！」

消し炭になりました。

第２９歩「ち、違う！僕は勇者なんかじゃないんだっ！」

「皆さんに紹介いたしますね。彼の名前はアレフ、私が通っている王立学校のクラスメイトなのです。」

「ど、どうも…」

とりあえず、お互いの自己紹介も兼ねて、近くにあった食堂で昼食にすることとなりました。
昼時を幾らか過ぎていたためか、人も疎らな店内で一通りの注文を済ませた後に、ローラ姫によって紹介された少年は、なんというか…

「勇者っていうよりは、いじめられっ子って感じよねぇ…」

「感じというか、学校ではよくいじめられてましたわね。」

「あ、あの…き、聞こえてるんだけど…」

ルミナスとローラ姫の言葉に肩を落とすいじめられっ子…もとい、勇者？アレフ。
まぁ確かに、どことなく影のある表情やらおどおどとした挙動やら、竜王様とは違った意味でいじめられっ子オーラと言うのが出ているのかもしれません。

「はむはむ…あへふほひゃは？」

「竜王様、ちゃんと食べ終えてからでないと行儀が悪いですよ？」

「もぐもぐ…うむ、それでアレフとやら、お主が勇者の血を引くも

ので間違いないのじゃな？」

「ち、違うっ！…ぼ、僕は勇者なんかじゃないんだ…」

勢い良く立ち上がって叫んだところで、周囲の視線が集まっていることに気づいたのか、慌てて椅子に座りなおしてボソボソと言葉を続けるアレフ。

「た、確かに父さんはお城で近衛騎士をやってたけど…ぼ、僕は剣すら握ったこともないんだ…」

「なんじゃ、親が騎士をやっておるのなら剣の使い方くらい教わらなかったのか？」

「だ、だって僕…あ、争いごとは嫌いだし…そ、それに父さんはこの前、魔物にやられて…」

そこまで言って顔を伏せたアレフと共に、辺りは重い空気に包まれました。

我々魔物は自衛以外で人を傷付けることを禁止されています。しかし逆に言えば、自衛のためならば人と争いごとになることもあるのです。

民を守るために戦う騎士…

友や家族を守るために戦う魔物…

当然、どちらかが命を落とすこともあるでしょう。

「あ…いやその、父親が亡くなっていたとは知らなくてじゃな…あの…ご、ごめん！」

「…え？」

バツの悪そうに謝る竜王様に対して、何故か不思議そうに首を傾げるアレフ。

「と、父さんはこの前、山でいきなり飛び出してきたスライムに驚いて、転んだ拍子にぎっくり腰になっちゃって…い、今は家でゴロゴロしてるんだけど…ど、どうかした？」

「……」

「あ、あの…？」

「……ま、紛らわしいんじゃぼけぇっ！！！」

「ひでぶっ！？」

…そーでしたね、人間たちの騎士団ってそんなのばっかりでしたよね。

第３０歩「アレフはちからつきた」

「……と、まぁそんなわけでだな、世界を救うためにお主の力が必用なんじゃ。」

「い、いきなりそんなことを言われても…」

ルミナスの魔法によって復活したアレフに、現在のアレフガルド状況を説明したのですが…案の定、混乱しているようですね。
まぁいきなり、世界を救うために力を貸してくれと魔王に言われて、はいと頷ける勇者もなかなかいないでしょう。
しかしながらそれが本当である以上、何とかして説得しなければならないのも事実です。

「アレフ…いきなりこんなことを話されて、直ぐには信用できないのも無理はありませんわ。
でも、竜王ちゃんの話は本当です。このままでは、このアレフガルドが消えてなくなってしまうのです…どうか、貴方の力を貸しては頂けませんか？」

「で、でも…や、やっぱり世界を救うなんて僕には無理だよ。」

ローラ姫の説得でも効果は無しですか…
単純に我々のことを信用していないだけならば説得の仕方もあるのでしょうが、アレフの場合は信用していないというよりも、自分に自信が無いことが原因のようです。
さて、どうしたものでしょうね…と、どうやら竜王様の我慢が限界に達したようです。

「ええい！さっきから聞いていればねちねちと女々しいことばかり言いおってっ！
アレフよ、心配は無用じゃ！ワシらがお主を一人前の男にしてやる！」

「ええっ！？い、いやあの…で、出来れば初めては大人のお姉さんに優しく…ぶぼっ」

「へ、変な勘違いをするでないっ！殴るぞ！？」

「もう…殴ってます…」

何やら二人揃って顔を赤くしてますが…風邪が流行っているのでしょうか？

「でも、どうやって一人前にするの？伝説の勇者の防具が見つかったとしても、こんなんじゃとても勇者とは呼べないわよ？」

ルミナスのもっともな疑問に対して、竜王様はいつも通りの不敵な笑顔で胸を張って宣言しました。

「ふん、こやつに足りないのは実戦経験と度胸じゃ。
ならば答えは簡単…足らないのなら実践で経験を積めば良いのじゃっ！」

そんなこんなで街の外にやって参りました。

「あ、あの…ほ、本当にやるの？」

「当たり前じゃ、武器まで買ってやったんだから、好い加減に覚悟を決めるのじゃ！」

心底嫌そうな表情をしながらも、竜王様に刃向かって逃げる勇気もないらしく、肩を落としながらも付いて来るアレフ。
その手には、街を出るときに武具屋で買ったこんぼうが握られています。
この辺りは人間の城や街に近いこともあって、人間に友好的な魔物が多いようですね。
辺りを見回せば、人間の子供と一緒に走り回るスライムや、ご老人の荷物を持ってあげているドラキーなど、いたって平和な光景が続いています。

「よし、この辺りでいいか…おい、そこのスライムよ、ちょっと頼みがあるんじゃが」

「あれ、竜王様？どうしたの？」

竜王様に呼ばれてやって来たのは赤い色のスライムこと、スライムベス。
確かにスライムやスライムベスは最も弱い分類に入る魔物ですから、経験を積むにはお手頃といえるでしょう。

「うむ、すまぬがこのアレフと戦ってくれんか？」

「まあ、竜王様のお願いなら良いけど…」

状況がいまいち理解できてないながらも了承してくれたスライムベスに対して…

「ええっ！？そ、そんないきなりスライムと戦うなんて…さ、最初は裏の家で飼ってるニワトリとかの方が良いんじゃ…」

アレフはダメダメでした。

「アレフ、応援してますから頑張ってくださいね？」

「ロ、ローラ姫…うぅわかった、やってみるよ！」

それでもローラ姫の応援（＋竜王様とルミナスの無言のプレッシャー）に背を押されて、何とか戦う決意が出来たようです。

「よし、では勝負のはじまりじゃっ！」

スライムベスがあらわれた！

アレフのこうげき

スライムベスはこうげきをかわした

スライムベスのこうげき

アレフは1のダメージをうけた

アレフはちからつきた

『うわ、よわっ』

これはなかなか…前途多難ですね。

寄り道「私の勇者」

あれは、いつ頃だっただろうか？

辺り一面を花で覆われた庭園…

「…っ…えくっ…ひっく……」

そこで、その少女は泣いていた。

あの時の僕は今よりもずっと子供だったから、

その少女が誰なのかも、なぜ泣いているのかもわからなかった。

でも、その少女には泣いていて欲しくなかったから…

だから、僕は約束をした。

「…やくそく？」

「うん、約束だ。何があっても僕が君を守る…だからもう泣かないで？」

「……うん！」

そして僕は…

「じゃあ、アレフは今日からわたくしの下僕ね？」

「……え？」

後悔という言葉を、その時に初めて知った。

「う…うぅ……」

何やらとてつもない悪夢から目を覚ました僕の目に最初に映ったのは、いつもの見慣れた自分の部屋のベット…ではなくて、見知らぬ部屋の天井だった。

「こ、ここは…」

「ここは、ラダトームの街にある宿屋ですわ。」

期待していなかった返事があったことに、慌てて声のした方を向くと…僕が寝ているベットの直ぐそばに置かれた椅子に腰掛けた一人の少女がいた。

「ゆ、ゆうれ…げぴょ！？」

「落ち着いてくださいアレフ、私ですわ。」

「……お、落ち着く前に首が落ちそうだったんだけど…」

首に感じた殺人的な衝撃によって遠のきかけた意識をなんとか引き止めつつ、相変わらずのニコニコ笑顔である少女に声を掛けてみた。

「ろ、ローラ姫…ぼ、僕は一体…？」

「竜王ちゃんたちが、スライムベスに一撃で昏倒させられた貴方をこの宿に運んで治療をしてくださったのです。明日会ったら、ちゃんとお礼を言わなくては駄目ですよ？」

「は、はあ…」

そういえば、魔王とか名乗っている女の子に無理やりスライムと戦わされたんだっけ？
そして、僕はまた負けたんだ…。

「こ、これで解ったでしょう？ス、スライムといえば普通の人でも勝てる、よ、弱い魔物にも僕は勝てないのに…ゆ、勇者になんてなれるわけ無いってことが…。」

「アレフ…」

怖くて俯いてしまった僕には、ローラ姫がどんな表情をしてるのか見えないけどわかる。
きっと失望していることだろう。
いや、失望なんてとっくに超えて、呆れているのかもしれない。

いつだってそうだった。

勉強だっていつもビリで…

学校の授業では、怖くて剣を握ることすら出来なかった…

どうしても言葉に詰まってしまって、

それがもとでよく苛められもした…
努力をしたって何も変わらなかった…
こんな僕が勇者であるわけが…
「…貴方は、勇者ですわ」
「っ！？」
顔を上げた先にあったのは、失望や呆れではなく、いつもの笑顔だった…

「ねえアレフ…私たちが初めて会ったときの事を覚えていますか？」
「う、うん…い、いきなり下僕にされたことは忘れてないよ？」
まだ子供だった頃に、父さんにお城へ連れて行ってもらった時にローラ姫に初めて会ったんだ。
そして何故か僕はローラ姫の下僕にされてしまって、今でもよくパシリに…。
「うふふ、あの頃はアレフにも随分と、無理難題を言って困らせてしまいましたね」
「あ、あの頃はって…い、今も…」

「…何か？」

「な、なんでもないです…」

ニコニコ笑顔のローラ姫の背後に、鬼が見えるのは…き、気のせいだよね？

「……貴方はあの時、泣いていた私を守ってくれると言ってくれました。
貴方は忘れてしまったかもしれませんが、私はあの時の言葉にとても救われたのですよ？
だから、もう一度お願いします。

世界の勇者になれないのなら、私の勇者になってくれませんか？」

勇者…

僕に出来るのだろうか？

…違う！そうじゃない！

僕には誰かを守るだなんて、そんな大それたことなんて出来ないかもしれない…

でも！それでも！

今も昔も、ただこの少女の泣いてる顔を見なくなかったんだ！

「ローラ姫…約束をする。

僕はもう逃げない！僕は…君の勇者になるよっ！！」

「ありがとうアレフ。
…では、明日からはもっとビシバシと扱きますから覚悟してくださいね？」

「……え？」

そして僕は再び思い出した。
後悔先に立たずという言葉の意味を…

「下僕に…なってくれませんの？」

「い、いやそれはちょっと…」

「……ぐすん」

「うわっ！？わ、わかった！君の下僕になるから！」

「……ほんと？」

「う、うん…でも、君も1つだけ約束して？」

「……やくそく？」

「うん、僕が君を守るから。
下僕にでも何でもなってあげるから
だから…

君にはずっと笑顔でいて欲しいんだ。」

「……うん、わかりましたわ。
わたくしはずっと笑顔でいますから…だから、アレフはわたくしの
勇者になってください。
やくそくですわ！」

第３１歩「アンタ…そんな趣味があったの？」

「…ここがその洞窟なのか？」

今、我々の目の前には大きな洞窟の入り口が、文字通りその口を開けています。

もちろん、ただの洞窟に遊びに来たのではありません。この洞窟こそ、世界を救うための力が眠っているかもしれない場所…

「う、うん…こ、ここが魔王を倒した勇者の墓が祭られている勇者の洞窟…だと思う。」

「あ、あの…ち、ちょっといいかな？」

スライムベスと勇者の歴史的な死闘から一夜が明けた朝。

朝食に全員が集まったところで、話を始めたのは意外なことにアレフでした。

「なんじゃアレフ、また泣き言でも言うつもりか？」

「そ、そうじゃなくて…せ、世界を救うためには勇者の使ってた防具が必要だって話してたけど…ぼ、僕に心当たりがあるんだ。」

「なんじゃと！？」

そう話すアレフの口調こそ詰まりながらのものでしたが、その瞳に

は昨日までは無かった意志の強さが見え隠れしていました。
…スライムベスに頭を殴られたせいでしょうか？

「と、父さんに聞いたことがあるんだ。こ、このラダトームの街の北のほうに、勇者の墓が祭られた洞窟があるって…」

「なるほど、確かに勇者さんのお墓にならば、生前に使っていた武具も一緒に奉られている可能性も高いですわね」

アレフの話では、その洞窟はラダトームから半日ほどの距離とのこと。
その洞窟に武具が無かったとしても、勇者の墓にならばなんらかの情報があるかもしれません。
そう考えれば行ってみても損はなさそうですね。

「やるじゃないアレフ！アンタも少しは勇者としての自覚が出てきたんじゃない？」

「ぼ、僕なんかがなれるかはわからないけど…で、でも決めたんだ。ロ、ローラ姫の「下僕」になるって…ええ！？ロ、ローラ姫？」

ルミナスの茶化しに照れながらも話すアレフに、何故か絶妙のタイミングで言葉を挿むローラ姫。

「ロ、ローラの下僕ってアンタ…そんな趣味があったの？」

「ち、違う！ご、誤解だよ！？」

「あら、子供の頃に約束してくれたではありませんか？」

「い、いやそうだけど…そ、そうじゃなくて…」

どん引きするルミナスに慌てて弁解をするアレフ。
心なしかローラ姫の顔が赤いようですが、本当に風邪が流行っているんですかね？

結局、その後の話し合いで、まずはその洞窟に行ってみようと言うことになりました。

第３１歩「アンタ…そんな趣味があったの？」（後書き）

諸事情により、原作に出てくる「ロトの洞窟」を「勇者の洞窟」へと改名させて頂いております。

…べ、別に書き間違いじゃないんだからね！

第32歩「ちょっとドラゴン、アンタそれで良いの？」

そんなこんなで勇者の洞窟の前までやって来た竜王様ご一行。
準備も万端！後は突入するのみ、なのですが…

「い、意外と暗いのじゃな…」

「洞窟なんだから、あ、あたりまえでしょ？」

何やら尻込みしている魔王と妖精がいます。
ああ、そういえば竜王様は暗いのが駄目なんでしたね。
夜中に一人でトイレに行けずに結局いつも…ゴホン、何やら死線を感じるのでこの話はここまでにしておきましょう。

「竜王様、いくら洞窟が真っ暗だと言っても、ちゃんとたいまつも準備しておりますので大丈夫ですよ？」

「べ、別にワシは暗闇が怖いわけじゃないぞ！？ほ、ほらその…あ、アレフがまた怖がるかと思ってだな…」

「え？ぼ、僕は暗いのは大丈夫だよ？」

おや、これは意外というかなんというか…

「む、昔から狭くて暗い所って好きなんだ…ほ、ほら、真っ暗な押入れの中に一人でいると心が落ち着いたりしない？」

訂正、アレフはアレフでした。

「うふふ…そうですわルミナスちゃん、私と手を繋いで一緒に入って頂けませんか？」

「べ、別にアタシは一人で大丈夫よっ！
…まぁでも、ローラがどうしてもって言うなら手を繋いであげても良いわよ？
か、勘違いしないでよ！？仕方なく繋いであげるんだからね！？」

どうやら、ルミナスの方はローラ姫に任せておけば大丈夫そうですね。
後は竜王様ですか…

「ど、ドラゴンよ、その…あの、えっと…お、お主がどうしてもと言うのならて…手を繋いでやってもいいぞ？」

「たいまつを持たなくてはなりませんので…申し訳ございませんが、アレフと繋いで頂けませんか？」

『……』

おや、何故か女性陣が白い目でこちらを見ているのですが、どうかしたのでしょうか？

「ちょっとドラゴン、アンタそれで良いの？」

「良いのかと聞かれましても…」

たいまつを片手で持つ以上、もう片方の手を竜王様と繋いでしまえば、いざという時に対応が遅れる可能性があります。
その点、アレフならば片手が塞がっていてもこんぼうを使うことが

出来ますし、そう思ってアレフを見た瞬間、何やら胸に言い様の無い感覚が…

「……」

「え…あ、あの…ド、ドラゴンさん？」

昨日感じた胸の痛みとはまた違った感覚なのですが…ふむ、皆さんが何を言いたいのか、なんとなく解った気がします。

「竜王様」

「……なんじゃ？」

「アレフと手を繋いだ後は、必ず手を洗ってくださいね？」

「ええっ！？ちょ、それ…ええ！？ぼ、僕ってどんな風に見られてるの！？」

その後、何故か女性陣にボコボコにされたのですが…一体何がそんなに気に障ったのでしょうね？

第３３歩「……おや？」

「では…先頭はワシとドラゴン、その後ろにローラとルミナス、殿はアレフの順番で行くぞ、よいな？」

たいまつを持った竜王様の号令で、ついに勇者の洞窟の中へと足を踏み入れることとなりました。

ふむ、一見すると洞窟は真っ暗なように思えましたが、実際に間近で見てみると洞窟の壁には淡い光を発する苔のようなものが生えているようですね。

これならば、もしたいまつの火が消えてしまうことがあっても、隣を歩く相手の顔を見るくらいの光量なら確保出来そうです。

「よ、よし…では行くぞドラゴン！

…絶対に手を離すでないぞ？」

そう言って歩み出した竜王様に、引きずられるようにして洞窟の中に…

―ゴン―

「……おや？」

―ゴン―

これは…

「どうしたんじゃドランゴン？」

「いえ、何やら見えない壁のようなものに阻まれて、中に入ることが出来ないようです。」

「なんじゃと！？」

まるで洞窟の中と外を区切るようにした見えない壁があるかのように、それ以上進むことが出来ません。
この壁のようなものに触れたからといって衝撃が走るわけでもないのですが、どんなに力を入れても突破は難しいようです。
困りましたね…

「でも、竜王はちゃんと洞窟の中に入ってるみたいだけど？」

「特定の人物しか入ることが出来ないようになっているのでしょうか…」

そんな訳で、他のメンバーも試してみた結果

「ぜ、全員入れましたね…ど、ドラゴンさん以外…」

…新手のイジメですか？

「うーん…僅かだけど、洞窟の奥から聖なる力を感じるわね。」

「なるほど…もしかしたら、それが魔物を退ける力になってるのかもしれませんわね。」

洞窟の奥を見ていたルミナスの言葉に、ローラ姫が相槌を打ちまし

た。
確かにそう言われてみると、この洞窟からはあまり良い雰囲気を感じませんね。
「で、でもそれなら…り、竜王さんも入れないんじゃないかな？」
「ふん！魔王であるワシを止めることなど、何人であろうと不可能なことじゃ！」
アレフの疑問に胸を張って答える竜王様。
まあ、ルミナスの話が間違っていなければ、この洞窟には竜王様たちに危害を加える者はいないでしょうし、洞窟の中には４人で入ってもらう他なさそうですね。
「では、私はここで待機しておりますので、洞窟の探索は皆さんでお願い出来ますでしょうか？」
「う、うむ！ドラゴン一人では心細いであろうから、ワシも残って…」
「はいはい、アタシだって怖いけど入るんだから、アンタも逃げないの！」
「にょわっ！？こ、これチンチクリン！離せ、離すのじゃー！」
「うふふ、なるべく早く帰ってこれるように致しますので、お土産を期待してて下さいね？」
「い、いってきます…」

そうして嫌がる竜王様を引きずりながら、一行は洞窟の中へと消えていきました。

第３４歩「おほほほほ、ちょっと友人のお墓参りに、ね…。」

遥かな昔、世界征服を目論んだ魔王を倒した勇者が使っていたとされる、伝説の武具…。
その情報を求めて、勇者の墓が奉られている洞窟へと足を踏み入れた竜王様ご一行。
そんな中、お留守番組である私が何をしているかというと…

「おほほほほ、やっぱりドラゴンちゃんの淹れる紅茶が一番ね。」

「……それはどうも。」

何故か珍客とお茶会をしております。

「おほほほほほ、誰かと思ったらドラゴンちゃんじゃないの」

その声が聞こえたのは、竜王様たちと別れて間もなくの事でした。
声が聞こえた方角…洞窟の入り口から出て来たのは、先程入って行ったばかりの竜王様たち…ではなくて、

「精霊ルビス、何故貴方がここに？」

洞窟から出てきたのは、忘年会がどうとか言って世界滅亡の危機を丸投げ…もとい、我々に託したルビスでした。

「おほほほほ、ちょっと友人のお墓参りに、ね…。」

友人…と、どこか愁いを帯びた表情で応えるルビス。
この洞窟に眠る人物が本当に勇者であるなら、ルビスとも深い関りがあったのでしょうし、ルビス自身にも思い入れがあるのかもしれませんね。

「そういうドラゴンちゃんこそ、こんな所に一人でどうしたの？」

「伝説の武具の手がかりを探して来たのですが…」

「伝説の武具？」

不思議そうに小首を傾げるルビスに勇者を見つけたことや、古の勇者が使っていた武具を探していること等を順を追って話すと、納得したらしいルビスは言いました。

「おほほほほほ…じゃあドラゴンちゃん、ちょっとお茶にしましょうか？」

…と。

第35歩「ドラゴンちゃんは、竜王ちゃんのこと好き？」

「おほほほほほ、勇者ちゃんたちが使っていた武具を探してここに来たのは良い着眼点だったけど…でも残念ね、ここには武具はないわよ。」

「…そうですか。」

何処からともなくルビスが取り出したティーテーブルでのお茶会にて、勇者の武具について話を聞いてみたのですが…どうやらハズレだったようですね。

「では、ルビスは勇者が使っていた武具が何処にあるのかご存知なのですか？」

「勇者ちゃんたちが使っていた武具の、いくつかは思い当たるのもあるけど…何処にあるかは秘密よ。
だって、皆で力を合わせて探すことも成長の一つですもの、おほほほほほ。」

むっ、そう言われれば引き下がるしかありませんね。まあ勇者が使っていた武具を集めるという方針に、間違いが無いことが解っただけでも良しとしましょう。

「そうだわ、ドラゴンちゃんに聞きたいことがあったんだけど。」

「なんでしょうか？」

「ドラゴンちゃんは、竜王ちゃんのこと好き？」

「……」

まるで、今日の天気を尋ねるかのごとく軽い口調で質問の投げかけてくる辺り、流石は精霊ルビスといったところですね。

「…もちろん、竜王様のことは敬愛しておりますよ。」

「おほほほほ、そんなベタな発言もドラゴンちゃんらしくて、おばさんは嫌いじゃないけど…竜王ちゃんを異性としてどう思ってるのかしら？」

そう言って、なにやらニヤニヤとした笑みを浮かべながら詰め寄ってくる創造主。

異性として…というのは、恋愛感情というもののことなのでしょうか？

そう言われて改めて竜王様のことを考えてみると、胸にもやもやとした感覚が…そう、この感覚はあれですね。

「そうですね、食べ過ぎに注意しなくてはと思います。」

「……おほほほほ、まぁそーゆーことにしておきましょうか？」

何故にルビスは、可哀想なものを見るかのような目でこちらを見てるのでしょうか？

気を取り直した様子で再度話し始めたルビスは、しかしながら最後まで言葉にすることが出来ませんでした。

「じゃあドラゴンちゃん、貴方は…」

「今帰ったぞドラゴンよ！…ってなんじゃ、何処かで見たような顔も一緒じゃな？」

「え…ママ！？どうしてここに？」

どうやら、竜王様たちが無事に戻ってきたようですね。

第３６歩「……な、なんでだろう？ゆ、勇者に似てると言われても素直に喜べな

「ではやはり、この洞窟には勇者の武具は無かったのですか」

二人から六人になったお茶会の席にて、洞窟の中の話を聞いていたのですが…ルビスから聞いていたとはいえ、もしかしたらという僅かな希望も潰えてしまいましたね。

「うむ、解ったことと言えば一つだけ…墓標に書いてあった名前、古の勇者がオルデガという名前であったということくらいじゃな。」

「勇者オルデガ、ですか…」

遥かな昔、世界の壁を越えた旅路の末に魔王を倒した勇者…彼らは何を思って世界を渡り…そしてこの世界で眠りについたのでしょう？

「あ、あのぉ…そ、その女性は一体…？」

「あーそういえば、アレフはママに会うのは初めてだったわね。この人はアタシのママで、アレフガルドの創造主であるルビスよ。」

「な、なるほど…ル、ルミナスのお母さん……えええええええっ！？！？！？」

そして、ポロリと取れてしまうのではないかと心配するほどに目を見開いて驚愕しているのが、現代の勇者見習いことアレフ。

まぁ、いろんな意味で想像の斜め上をいくルビスを見れば、誰でも驚くのは無理は無いでしょう。

対してルビスといえば…

「まあ！まあ！貴方が勇者ちゃんの子孫なのね！？
確かにこうして見ると、顔立ちもそうだけど…気の弱そうだったり根暗そうだったりするところなんて勇者ちゃんにそっくりね！」

「……な、なんでだろう？ゆ、勇者に似てると言われても素直に喜べない…」

…まったくもって、この人（精霊？）はいつでもマイペースですね。

「ところでルビス様？勇者の武具についてなのですが…」

「おほほほほほ、在り処についてなら秘密よ？」

ローラ姫の問い掛けをばっさりと切り捨てるルビス。
やはり、武具の所在について教える気はないようですね。

「なんじゃ、ケチな創造主じゃのう…ヒントくらいくれても良いじゃろう？」

「ヒントって、アンタねぇ…これはクイズゲームじゃないのよ？」

頬を膨れさせてぼやいた竜王様に、呆れた様子で突っ込みを入れるルミナス。
唯一の手がかりであった勇者の洞窟が空振りで、振り出しに戻ってしまったわけですから、竜王様の気持ちもわからなくはありません

が…

先程の様子からして、ルビスも簡単に折れるとは…

「おほほほほ、じゃあちょっとだけヒントをあげましょうか？」

あっさりと折れました。

第37歩「僕が困りますよ！？」

「おほほほ、皆はガライという吟遊詩人のことを知ってるかしら？」
勇者が使っていたとされる伝説の武具。
それらの所在についてのヒント…かと思いきや、何故か吟遊詩人の話を始めた精霊ルビスに対して、いち早く反応したのはローラ姫でした。

「確か…魔物と意思を通わせることの出来る銀の竪琴の力で、古の勇者の旅を助けたと言われている吟遊詩人でしたわね。」

「おほほほほ、流石はローラちゃん！歴史のこともよく勉強してるわね。
ローラちゃんの言う通り、ガライは勇者ちゃんと共に戦うことこそ無かったけど、様々な苦難に阻まれた勇者ちゃんたちの危機を救ったとされているわ。
そして、ガライには吟遊詩人以外にもう一つの顔があったの。」

「もう一つの顔…じゃと？」

「ええ、ガライは吟遊詩人としてだけではなく、預言者としても類稀なる力を持っていたの。
現在のラダトームやその他の町や村に伝わる伝承のいくつかは、ガライから伝えられたとされているくらいにね。」

吟遊詩人にして預言者であったガライ…ですか。
…はて？会った事は無いはずなのに、その名前を聞くと無性にぶん殴りたくなるのは何故でしょう？

「あ、あの…ドラゴンさん？な、なんで僕の事を獲物を見るような目で見てるんですか？」

「いえ、アレフならサンドバックにしても誰も困らないかと思いまして。」

「僕が困りますよっ！？」

そう言って、何やら怯えたように後ずさるアレフ。

ふむ、残念ですね。

「そのガライとかいう吟遊詩人に話を聞けば良いのじゃな！」

「アタシたちのような妖精や竜王たちみたいな魔物ならまだしも、勇者や魔王がいた頃の人間じゃもう生きてないでしょ？」

「に、人間だって根性があれば１０００年くらい生きられるハズじゃ！」

根性で１０００年も生きられるのなら、アレフガルドは今頃人間で溢れ返っていることでしょうね。

「うふふ、私たちには１０００年はちょっと難しいでしょうけど…人間は一代で全てが終わってしまうわけではありませんわ。ね、アレフ？」

「え？ぼ、僕？」

ローラ姫の意味深な視線に対して、何を勘違いしたのか頬を赤く染

めて俯くアレフ。
なるほど。確かに勇者の子孫がいるのですから、吟遊詩人の子孫がこの時代にいても不思議ではありませんね。
「そう、この洞窟のさらに北西にあるガライの村…
そこに吟遊詩人ガライの子孫がいるわ。」
どうやら、次なる目的地が決まったようです。

第３８歩『海だー！』

アレフガルド大陸で最も北西に位置するガライの村。
【最も】とはそれすなわち、陸地の端ということでもあり、それはどいう事かと言うと…

『海だー！』

そう、海に近い村ということです。

「竜王様、我々はこの村へ遊ぶために来たのではありませんよ？」
村へ着いて直ぐに、海へと直行しようとする竜王様とルミナス。
気持ちが浮かれてしまうのはわからなくありませんが、我々にはガライの子孫を見つけると言う目的がある…のですが…。

「い、いや違うぞ？これは遊びたいとかじゃなくてだな…そう！ガライの子孫とやらが海で溺れているかもしれないじゃろう！？」

「そ、そうよ！別にアタシたちは海で泳ぎたいとか遊びたいとか思ってるわけじゃないんだからねっ！」

…瞳をキラキラと輝かせながら訴えられても、まったく信用できないのは私だけでしょうか？

「まぁまぁドラゴンさん、この村に来るまであまり休憩も出来ませんでしたし…たまには身体を休めることも大切ですわ。」

そう言って微笑むローラ姫の表情にも、何処か疲労の色が出ているようです。
確かに人間よりも体力のある私や竜王様、常に飛んでいるルミナスは兎も角として…姫君であるローラ姫や、ましてやスライムに一歩どころか三歩も四歩も劣る体力しかないアレフには、厳しい旅路であったかもしれません。
…良く見れば、アレフはこの村にたどり着くまでに力尽きたのか、道端に倒れてピクリとも動きませんしね。

「よし！では今日一日は海で遊び尽くす…もとい、骨休めじゃ！」

「おーっ！」

そう言って再び海へと走り出す竜王様とルミナス。
まぁ、たまにはこんな日があっても良いのかもしれませんね。

海水浴客で賑わう浜辺までやって来た竜王様ご一行。
どうやらこの地方の海はアレフガルドの中でも比較的温暖なようで、光が閉ざされた今でも海に入ることは出来るようなのですが…問題が一つあります。

「むぅ、海で遊ぶと解っておったなら水着を持ってきたのじゃが…」

そう、誰も水着を持っていないのです。
まぁ世界を救う旅に水着を持っていく者の方が少ないのでしょうけど。

「困りましたわね。私やアレフのようなサイズの水着なら売っているようですけど、流石にルミナスちゃんのサイズとなると…」

手のひらサイズの水着はそう需要は無いでしょうしね。

「ご安心くださいー、水着なら我々が持ってきましたよー？」

そんな我々に差し出された救いの声は、何処かで聞いたことのあるような、間の抜けた声でした。

第３９歩「楽しいお着替えタイムのはじまり…」（前書き）

水着回のため、今回の文量は普段の１．５倍増しです（キリッ

第３９歩「楽しいお着替えタイムのはじまり…」

「お、お主たちはメイド娘！なんでこんな所におるんじゃ！？」

差し伸べられた救いの手（？）は、城で留守番をしている筈のメイド少女たち…ラン・リン・ルンの３人でした。

それにしても竜王様は、すっかりこの３人が苦手になってしまったようですね。

顔を見たとたん、私の陰に隠れて威嚇をするのは周囲の注目を浴びるので止めて欲しいのですが…

「あー、それはですねー？」

「お城でお掃除をしてたら精霊ルビスがやって来たんです！」

「竜王ちゃんたちが…ガライの村に行くことになったから水着を届けて欲しいって…」

「ママが？」

…まぁ、あの神出鬼没な創造主ならば、何処で何をしていても不思議ではないですけどね。

「はいー、出来るだけ可愛いのをと言われたのでー？」

「ラダトームで流行ってる水着を厳選して持ってきました！」

「楽しいお着替えタイムのはじまり…」

「水着を持ってきてくれた事には感謝するが、着替えるのは一人で出来る…ってオイコラ！こんなのところで服を脱がそうとするな…うにゃ！？だから下着はやめるんじゃーーーー！！」

竜王様の悲鳴を残して脱衣所へと向かう女性陣たち。
なんにしても、これで海を眺めるだけの海水浴にはならなくて済みそうですね。

寄せては帰る波の音…
水辺ではしゃぐ子供たちの声…
これで後は、輝く太陽の光があれば絶好の海水浴日和だったのでしょうけどね。

「み、みんな…お、遅いですね…」

いち早く水着へと着替え終わった私とアレフで、浜辺の空いているところに場所に荷物置き場を確保したのですが、他の方はまだ着替えが終わらないようですね。

「女性の着替えは男よりも時間が掛かるのが常です。もうしばらくすれば皆さんいらっしゃいますよ。」

「そ、そうですよね…」

まぁ、先程まで聞こえていた竜王様の悲鳴が聞こえなくなったようですし、そろそろだと思うのですが…

「お二人とも、お待たせいたしましたわ」

「あ…ロ、ローラひ…ぶぎゅっ！？」

呼ばれた声に振りむいたアレフが、いきなり鼻血を吹いて倒れました。

直射日光にでもやられたのでしょうかね？

「アレフ！？大丈夫ですか！？」

慌ててアレフに駆け寄るローラ姫の着ている白いビキニタイプの水着は、同じく白い素肌と黄金の髪に相まって幻想的な美しさを引き出しているようです。

「ちょっとドラゴン、ローラの水着だけじゃなくてアタシのも見なさいよ！どう？可愛いでしょ？」

そう言ってポーズをとったルミナスが着ているのは、ワンピースタイプの水着ですね。

明るいオレンジ色と愛らしいフリルが、まさしく妖精のような可憐さを醸し出しています。

「ええ、とてもよく似合ってますよ。」

「べ、別にアンタに誉めてもらうために着たんじゃないけど…ま、まぁ一応お礼は言っておくわ。

…あ、ありがとう。」

そして残る一人、竜王様と言うと…

「ド、ドラゴン…これはその、あのだな…」
…なにやら岩陰からモジモジとやっています。
「ほら、アンタもせっかく水着を着たんだからドラゴンに見てもらいなさいよっ！」
「うわっ！？こ、これやめんかルミナス！……あ」
「……」
ルミナスに引っ張り出された竜王様が着ていた水着は…その、なんと表現したら良いのでしょう？
「い、いや！これはルビスがワシのために異世界から手に入れてきた水着らしくてだな…
ワシとしては普通の水着が良かったんだがその…あの…うぅ…そ、そんなに見るでない！
こ、これ以上ワシを見たら絶交じゃ！」
一見すると紺色の、ルミナスと同じワンピースタイプの水着なのですが…何故か胸元に縫い付けられた白いゼッケンのようなものに「りゅうおう」という名前が書かれています。
「とてもよく似合ってらっしゃいますますよ、竜王様。」
「ほ、ほんとか！？
ま、まあワシが着ればどんな水着でも似合っておるのは当然じゃがなっ！」

それにしても、ルビスは一体何処からこんな水着を持ってきたのでしょうね？

第４０歩「くらえ勇者よ…魔王アターーーーック！！！」

偉大なる吟遊詩人にして預言者であったガライの子孫を探しにやって来た、ガライの村。
村にたどり着いた我々が現在、何をしているかと言うと…

「今よ竜王っ！」

「ナイストスじゃルミナス！くらえ勇者よ…魔王アターーーーック！！！」

「ち、ちょ…ぽぎょっ！？」

海を満喫しております。

「そういえば、お腹が空いたのう…」

ふと気がついたように呟いた竜王様の声に、皆が遊ぶ手を止めました。
太陽が見えないせいで気づきませんでしたが、どうやらもうお昼を過ぎているようですね。

「確か…向こうに屋台が何件かありましたね。何か食べ物を買って来ますので少々お待ちください。」

「あ、ドラゴンさんだけでは全員分の食事を運ぶのは大変でしょう

から、私も一緒に行きますわ。」
そう言って立ち上がったのはローラ姫。
何故か村に着いたときよりもボロボロになっているアレフに頼むのも酷ですし、ここはローラ姫の申し出に甘えることにしましょう。
「では、よろしくお願いしますローラ姫。」
「はいですわ♪」
「うむ、では頼んだぞ！」
「アタシは焼きそばをお願いね。」
「あ…す、すみません…よろしくお願いします…」
かくして留守番の三人に見送られ、屋台へと向かいました。

「ふう…こうして浜辺を歩いていると、世界が滅亡の危機に瀕しているなんて嘘みたいですわね。」
「…そうですね。」
大きく伸びをしながら周囲を見渡すローラ姫に対して、自然と口から出たのは同意の言葉でした。
波打ち際ではしゃぐ子供たちや、それを温かな目で見守る父親と母親…

浜辺では寄り添い語り合う恋人たち…
その誰もが、この平和な日常がいつまでも続くことを信じていることでしょう。

「この平和な日々を…この笑顔を…私は守りたい。」

「ローラ姫…」

「ふふ、私だけでは途方にくれてしまうところですけれど…皆と一緒ならどんな事だって出来るって、そう思えるんです。」

そう言って微笑むローラ姫。
未だ僅かにしか見えてこない光明…
例えそれがどんなに小さく儚い光だとしても、皆で力を合わせれば今度こそ…

…と、そういえばあのメイド娘たちの姿が見えませんが、どうしたのでしょう？
そう思いローラ姫に聞いてみたのですが…

「彼女たちなら竜王ちゃんの着せ替え人形が出来て満足したらしく、満ち足りた笑顔で帰りましたわ。」

…返ってきたのは予想通りな答えでした。
本当に、竜王様の周りには変わった人たちが集まってきますが…こういうのを類は友を呼ぶと言うのでしょうね。
そんなこんなで屋台まであと少しというところで、その声は聞こえていきました。

「…お待ちしておりました。

世界に再び光を取り戻す者たちよ。」

第４１歩「…最近の生首は喋るんですね。」

「…お待ちしておりました。
世界に再び光を取り戻す者たちよ。」

その声に導かれるように振り向いた先にいたのは…

「…最近の生首は喋るんですね。」

「あら、この辺りの名物なのでしょうか？」

そう、呼びかけてきたのは砂浜の上にポツリと置かれた生首でした。

「いやいやいや、生首じゃなくて首から下を砂浜に埋められてしまってるだけですからね？
まあ、わたしとしてはもう少しこの状況を楽しんでいたいところですが、せっかく運命的な出会いも出来た事ですしそろそろ…ごめんなさい調子に乗ってました本当にすみません！謝りますから何事もなかったかのように立ち去ろうとしないで掘り起こしてプリーズ！」

…本当に、類は友を呼ぶのですね。

「いやぁ、浜辺を一人で歩くビーティフォーな水着美女がいたのでお茶に誘ったところ、どうやら既に彼氏と言う名の相棒が居たようでして…仕方ないので三人でお茶をしようと申し出たら、何故か怒り狂った彼氏さんに生き埋めにされて困っていたところだったんで

すよ、はっはっはっ…あ、申し送れました。
わたしは吟遊詩人にして愛の探求者、ガルチラと申します。
以後お見知りおきを。」

ぽぺろぽろーん

そう言って一礼し、やたらと音程の外れた調子で銀色の竪琴を爪弾く生首…ことガルチラ。
しかし、浜辺で竪琴というのもそうですが、周囲は水着姿の老若男女ばかりだというのに、何故にこのエセ吟遊詩人は見るからに暑そうな法衣なんて着てるのでしょうね？

「はっはっはっ、解っていませんね。吟遊詩人といえば楽器と法衣です！そして吟遊詩人とは適当にそれっぽい事を言ってれば女の子にモテモテになれる職業なのです！」

「…そうですか。」

…この男は一度、世界中の吟遊詩人に自分が生まれてきたことを謝った方が良いと思います。

「え、ええっと…こちらの自己紹介がまだでしたわね。
私はローラ、そしてこちらの殿方はドラゴンさんです。
よろしくお願いいたしますわ。」

「おお！白金に輝く神の化身と見紛う程にお美しい貴方様に相応しいお名前ですね、ローラ様。
…そして、何故にそちらのドラゴン殿は獲物を狙うライオンのような目でわたしを見つめているのですかな？」

「いえ、ちょっと世界の平和のために、そこの生首もどきを本当の生首にしようかと思っただけですからお気になさらず。
…別に減るものじゃありませんし。」

「いやいやいや！それってわたしの一つしか無い命が減っちゃいますからね！？」

やれやれ、心の狭いエセ吟遊詩人ですね。

「まあまあドラゴンさん…それにしても、私たちが貴方を探していることがよくわかりましたね？」

言われてみれば確かに、我々はこの村に着いてから聞き込み等はまだ行っていませんでした。
その辺りは腐っても預言者の子孫と言ったところでしょうかね？

「なに、簡単なことですよ。
ローラ様のように美しい女性に片っ端から同じ事を言って回っていただけですから。」

…訂正、やっぱりただの変態でした。

第４２歩「ごぼぅ！？」

吟遊詩人ガライの子孫であるガルチラ。
予想外とはいえ、目的の人物に出会えた事を報告するため、急ぎ留守番組の元へと戻ってきた我々を出迎えたのは、竜王様の胡散臭そうな目でした。

「…で、お主がガライの子孫なのか？」

「いかにも…わたしが吟遊詩人にして恋の道先案内人、ガルチラです。
どうかお見知りおきを、小さく美しい嬢さんたち。」

ぼこぺぽーん

…まったくもってどうでも良い事ですが、最初に会ったときは愛の探求者とか言ってませんでしたっけ？

無事（？）に留守番組みとの顔合わせを済ませることが出来た後、まずはすっかり遅くなってしまった昼食にするため、浜辺にあった海の家へと行くこととなりました。

「海に流した青春の汗と涙の焼きそばを４つに、仄暗い海の底の魚介類カレーが２つですね？少々お待ちください。」

「商売する気あるの？この店…。」

まったく食欲の出ない名前しかないメニューを復唱して厨房へ戻る店員を尻目に、ため息をつくルミナス。

まあ確かに、汗臭そうだったりホラーにしか聞こえないようなネーミングセンスのメニューばっかりなところを見ると、商売の方向を見失ってる気がしないでもありません。

「それはともかくとしてじゃ…ガルチラよ、お主に聞きたいことがあるのじゃが？」

「わたしに解ることであればなんなりと」

ぺこぷぴーん

竜王様の問いかけに、やはり音程の外れまくった調子で竪琴を爪弾き応じるガルチラ。

「うむ、ワシらは闇に覆われた世界を元に戻すために旅をしておるのじゃが…」

「なるほど」

べこべべーん

「…それで、世界を救うためにはいくつか必用なものがあるんじゃ。」

「ふむふむ」

ぽこぽびーん

「……その必用なものと言うのが…」

「言うのが？」

ぽぽぽぽーん

「……ええい！パコパコうるさいんじゃぼけぇ！！」

「ごぼぅ！？」

…竜王様の堪忍袋の結が切れたようです。

第４３歩「ええ、もちろん知っておりますよ。」

「…なるほど、勇者が使っていた武具ですか。」

「うむ、それらの武具が何処にあるのか、何か言い伝えのようなものはないか？」

吟遊詩人にとって竪琴は命だとか、これがなければ女の子にモテモテになれないとか戯言を抜かしていたガルチラですが、竜王様の【平和的なおねがい】によって真剣に考えてくれているようです。

…何故かガクガクと震えていますけど。

「ええ、知っておりますよ。」

「おおっ！本当か！？」

「はっはっはっ、この情熱の申し子ことガルチラに解らないこと事などありませんよ。

ですが、伝承についてお話をする前に…一つだけ、お願いを聞いていただけませんか？」

「願い事じゃと？」

「ええ、こう…上目遣いでわたしを見て懇願しながら「お願い、お兄ちゃん…」と言ってみてくだブルァッ！？」

…この変態の辞書には、反省と言う言葉は無いのでしょうかね？

「…伝承では、勇者が身に着けていた剣と鎧は、魔王に殺された死者を弔うために、それぞれ奉られたと言われております。」

「なるほどね…確かに、勇者が使っていた武具なら聖なる力を帯びていてもおかしくはないし、そう言ったものなら、死者を弔うために使うのも悪くないわね。」

ガルチラの言葉に、感心したように頷くルミナス。
勇者が魔王を倒すために用いた武具ならば、類稀なる力を持っていることでしょうし、過ぎた力は平和を乱す元凶にも成りかねません。放り出されて悪用されるよりは奉り敬われている方が、人間たちとしてもずっと安心だったのでしょうし、我々としても助かりますね。

「それで、その剣と鎧は何処に奉られておるのじゃ？」

竜王様の問いかけに対して、ガルチラは手に持った竪琴を爪弾こうとして…全員から向けられた白い視線に気づいたのか、咳払いを一つして話し始めました。

「ゴホン…勇者が身に着けていた鎧は、古の魔王に滅ぼされたドムドーラの町の人々を弔うために、町の跡地に奉られたと言われております。」

「ドムドーラと言うと、確かアレフガルドの南部の砂漠にあったと言われている町ですわね。」

「ええ、かの地の事は、かつてドムドーラが健在だった頃に親交のあった、城塞都市メキルドで話を聞けば詳しい場所も解る事でしょ

う。」

ローラ姫の言葉に頷き、補足を導くガルチラ。

…本当に、こうして真面目な表情をしてローラ姫と並んでいれば、王族の人間のように見えないこともないんですけどね。

第４４歩「…なんじゃ、ワシらに温泉に浸かりに行けとでもいうのか？」

「そしてもう一つの武具…勇者の使っていた剣ですが、こちらは勇者の友の墓に奉られている言われております。」

「勇者の友の墓、ですか？」

ふむ…鎧が街の慰霊に使われたのに対して、剣は随分と個人的な弔いのために使われたのですね。
残る一つの武具の伝承を語るガルチラに、一同は首を傾げました。

「それで、勇者の友とやらの墓は何処にあるのじゃ？」

「それが…伝承では、その墓の人物は勇者の親しき者であったという事のみで、残念ながら詳しい場所は記されては居ないのです。」

「むぅ…」

竜王様の問いかけに対して、首を振り応えるガルチラ。
どうやら、剣は一筋縄では行かないようですね。

「じ、じゃあ…ま、まずは鎧のことを調べにメキルドに行くのが良いのかな？」

確かに手がかりの少ない剣を探すよりも、まずはある程度の場所が解っている鎧を探した方が良さそうですね。
しかしながら、鼻の穴に詰め物をしてなんとか復活したアレフの言葉に、待ったを掛けた人物が居ました。

「いえ、貴方たちがまず向かうべき場所は他にあります。
それは…マイラの村です。」

「マイラの村？」

今までの話の中に出てこなかった村の名前を挙げるガルチラに対して、またまた首を傾げる一同。

「マイラの村と言うと…ここから東方にある温泉で有名な村ですわね。」

「…なんじゃ、ワシらに温泉に浸かりに行けとでもいうのか？」

「もちろんですとも！温泉で上気した頬…そして浴衣より覗く白いうなじ！これ程までに女性の神秘を表す姿など他にありませんバチョッ！？」

何やら熱く語りだしたところを、竜王様のツッコミによって強制的に終了されたガルチラ。
…何故か再びアレフが鼻血を噴き出して倒れましたが、一体何を想像したのでしょうね？

「はっはっはっ…今のは個人的な趣味趣向ですが、マイラの村に向かうべき理由があるのは本当です。
何故ならマイラの村には、この世界の危機を救ったある物が奉られているからなのです。」

…どうやら、マイラに向かうべきなのは本当のようですね。

第４５歩「いろいろと迷惑だから止めて」

「マイラの村に奉られている、過去に世界の危機を救った物…それはズバリ、妖精の笛です。」

「妖精の笛？何じゃそれは？」

妖精の笛…
それが勇者の武具よりも先に探すべきものであると語るガルチラ。
その名に首を傾げる竜王様に、いち早く反応したのはルミナスでした。

「聞いたことがあるわ。魔王によって石にされてしまったママを、異世界から来た勇者が救い出したときに使った魔法の笛のことよね？」

「その通りです、流石は精霊ルビスの愛娘ですね。
貴方の英知を称えて一曲歌わせていただきましょう。」

「いろいろと迷惑だから止めて」

竪琴を取り出したガルチラをばっさりと切り捨てるルミナス。
まあ自業自得ですから、この世の終わりのような顔をしているガルチラの事は放っておくとしましょう。

「ふむ、古の勇者が使ってた笛ならば何かの役に立つかも知れんな。
ならば、まずはマイラの村に行って妖精の笛とやらを探すとするかの？」

竜王様の問いかけに、皆は一様に頷きました。

「妖精の笛は、この銀の竪琴と同じく邪悪な力を浄化する力を秘めていると言われております。
そして…その力を正しく扱うことの出来る者を探しているとも。」

「探しているじゃと？」

「はっはっはっ、それはマイラの村に行けば解りますよ。
皆さんの旅の先に光がある事をお祈りしております、どうかお気をつけて…」

ぼこぺきょーん

かくして、やっぱり音程の外れた竪琴の音色に背を押され、マイラの村へと向かうこととなりました。

第４６歩「はっはっはっ、さぁいざ行かん！シャングリラへ！」

「ふむ、ここがマイラの村か。」

ガルチラと別れて新たなる目的地へと向かった我々の前に現れたのは、温泉独特の匂いと湯煙でした。

目的は当然のことながら、伝説のレアアイテムこと妖精の笛のゲット…なのですが、

「せっかく温泉の名所に着たのじゃから、まずは温泉を堪能しなくてはな！」

その竜王様の一声で、宿へのチェックインもそこそこに、一同は温泉へと向かうこととなりました。

「ではドラゴンとアレフ、また後でじゃ！」

「はい、ゆっくりと温泉に浸かってきてください。」

「ま、また後で…」

温泉の入り口で待ち合わせをすることにして、男湯と女湯へと別れて暖簾を潜りました。

「ぼ、僕、温泉って初めてなんです。」

「言われてみれば、私もこうした本格的な温泉に入るのは久しぶりですね。」

竜王様の城のお風呂も結構な大きさでしたが、こうして外の風景を楽しみながら浸かることの出来る露天風呂というのも、悪くはなさそうですね。

さて、準備も整ったことですし、更衣室の扉を開けて露天風呂へと歩みを進めると…

「お待ちしておりました。

世界に再び光を取り戻す者たちよ。」

ポンポコピーン

…何やら二度と会いたく無かった先客がいたようです。

「ガ、ガルチラさん…ど、どうしてここに？」

露天風呂に浸かりながら竪琴を爪弾くガルチラに、驚きの声を上げるアレフ。

…どうでも良いのですが、銀製の竪琴を温泉につけると痛むのではないでしょうか？

「はっはっはっ、皆さんと別れた後にある事を思い出しましてね、

慌てて後を追ってきたのですが…どうやら途中で追い越してしまったようですね。」

「思い出したこと…ですか？」

妖精の笛のことか…または、あまり伝承に残っていなかった勇者の剣のことでしょうか？

「ええ…ですが、そんな事は今となっては些細なことです。
我々にはもっと重要な、やらねばならない事があるのですからっ！」

そう言って、竪琴を爪弾くのも忘れて興奮気味に立ち上がるガルチラ。

こんなに真剣な表情のガルチラを見るのは初めてです。
これはひょっとすると…

「隣の女湯には現在、うら若き美女たちが入浴中なのですよ？
ならば我々が成すべき事は唯一つ…そうです！女湯と言う名の楽園をこの目に焼き付けることですっ！！」

…やっぱりただの変態でした。

「えええっ！？だ、ダメですよ！の、ののの覗きなんて！」

慌てて否定するアレフ。
その前にまずは、その鼻血を何とかした方がいいと思うのは私だけでしょうか？

「何を言っているのですかアレフ！貴方はローラ姫のあの大人と子供の間の危ういバランスの上に成り立つ秘境や、幼さの中に僅かに

芽生えた女の子の魅力あふれる竜王様の四肢、その種を表すとおりの神秘的なルミナスの裸体を心逝くまで堪能したいとは思わないのですか！？」

…だんだん表現が雑になっているのは気のせいでしょうか？

「そ、それは…み、見たくないといえば嘘になりますけど…で、でも！覗きなんて絶対にダメです！」

普段の流されやすい性格とは思えないほど強く反発するアレフ。流石は勇者のたまごといったところでしょうか。

「やれやれ…何を勘違いしているのですか？これは少女たちの美を後世に残すためのサーガ作りに必用な、言わば伝説を作るための冒険なのです。そんな偉大なる仕事を、覗きなどと言う下賤な物事と一緒にしてはいけません！」

「え？で、でも…」

「それに、お忘れですかアレフ？勇者になるには幾多の困難な試練を乗り越えなくてはならないと言うことを。つまり、これも大人の階段を登り、立派な勇者となるための試練なのです！」

「な、なるほど！」

あっさり丸め込まれる勇者のたまご。やれやれ、付き合っていられませんね…久方ぶりの露天風呂も満喫

したことですし、そろそろ上がるとしますか。

「あ、あれ？ドラゴンさん…も、もう上がっちゃうんですか？」

「試練に挑む勇気のない者など放っておきなさい。
そんな事よりも勇者アレフよ。
わたしはこう見えてこの露天風呂の常連客ですから、何処からなら安全に女湯を覗く事が出来るか把握しているのです！」

「そ、そうなんですか？す、凄いですガルチラさん！」

「はっはっはっ、さぁいざ行かん！シャングリラへ！」

その後、一夜にして跡形も無く消し飛んだ男湯跡から、消し炭となった人型の物体が２つ見つかったそうですが…まぁ、些細なことですね。

第４７歩「用が無いのなら半径５ｍ以内に入ってこないでくださいね？」

「それで、お主は一体何をしにきたのじゃ？」

「はっはっはっ、ですから大事なことを伝えにきたと言っているではありませんか。」

突如として温泉が消し飛ぶと言う騒動から一夜が明けました。
渋々ながらも回復魔法を使ったルミナスのお陰で一命を取りとめた消し炭その一ことガルチラは、まったく悪びれた様子も無く応えながら、朝食を口にしています。
ちなみに、消し炭その二の方はというと…

「あ、あの…ロ、ローラ？」

「あら、何か御用ですか？覗き魔さん？」

「い、いやあの…」

「用が無いのなら半径５ｍ以内に入ってこないでくださいね？」

「うぅ…」

…こちらはこちらで、何やら修羅場になっているようですね。

「それで、大事な事とはなんじゃ？」

「ええ、実は妖精の笛について、とても大切な事を伝えるのを忘れていたのです。」

余程重要なことなのか、朝食の手を止めて真剣な表情になるガルチラ。

「過去に精霊ルビスを石にした魔王が退治された後、再び世界に危機が起こったときに備えて、妖精の笛はこのマイラの村の村長が代々守ってきました。
そして、世界が闇に覆われると言う異常が発生した今、この村では妖精の笛の継承者を探すためにある試みが行われるようになったのです。」

なるほど、勇者が使ったと言われている魔法の笛ですから、その継承者たる資格を示すための試練となれば、相当困難なものなのでしょうね。

「ふーん。それで、その試みって何なの？」

ルミナスの問いかけに対して、ガルチラは目を瞑りしばし沈黙した後…カッと目を見開き叫びました。

「妖精の笛の後継者を見つけるための試み…それはズバリ

浴衣美女コンテストです！」

『……はぁ？』

…訂正、無茶苦茶な試練でした。

今後の投稿について

夏だ！花火だ！眼球だ！
というわけで夏も真っ盛り！まだまだ暑い日が続いておりますが、皆様は如何お過ごしでしょうか？
私は毎日のように脳が蕩けています。
はい？お前の脳ミソなんて蕩けようがストローでちゅーちゅーされてようがどうでも良いですって？
はいその通りですね、すみません。

さて、
私事ではございますが、表題の件に先駆けまして、近況についてご報告させて頂きます。
私はサラリーマンという職業についているのですが、この度（というか、つい数時間前）地方への転勤を言い渡されました。
転勤自体は別に構わないのですが、言い渡された次の日から行けとかお前の脳にはミソの代わりに増えるワカメでも入ってるのかと小一時間問いただしたい所です…が、もちろん平サラリーマンにはそんなこと言えるはずも無く、返事二つで了承してきましたとも！（泣）
結局のところ何が言いたいのかと言いますと、しばらく小説の投稿を行うことが出来なくなると思われます。
と、言いますのが、私が主に小説を書いている時間帯は、朝と夜の通勤の電車の中が殆どでした。
しかしながら、転勤先は会社から１０分と掛からぬ社員寮であり、仕事の内容も今まで行っていた仕事とはがらりと変わってしまうため、小説を書く時間と心のゆとりが無くなってしまいました。
そのため、２日に１度のペースで更新させていただいておりましたこの『今日もアレフガルドは平和です』でございますが、同じ頻度

で更新することは不可能に近く、かなりの不定期連載になると思われます。

小説と言うにはあまりに稚拙な物語であったのに、それでも更新を楽しみにしていると言って下さった方々には大変申し訳なく思っております。

しかし、どんなに時間が掛かろうとも、決して尻切れトンボな終わり方ではなく、思い描いているフィナーレまで絶対に書き遂げますので、どうか…彼らの冒険に最後までお付き合い頂ければ幸いです。

２０１１．８．９　みなみなみな

第４８歩「…なんというか、竜王様みたいな思考の持ち主ですね、この村の村長

「なんなのじゃ…その浴衣美女コンテストとかいうふざけたものは？」

「フッ、わからないのなら教えて差し上げましょう。
温泉といえば浴衣っ！浴衣といえば浴衣美女っ！！
そして温泉に入り上気した頬に艶やかなうなじ…そう、浴衣こそが人が生み出した全ての英知の頂点に立つポニョ！？」

「…言い忘れたがの、要点だけを話さんと殴るぞ？」

「はっはっはっ、そんなに恐ろしい表情をしていては、せっかくの美しいお顔が台無しですよ？」

べちこぴーん

竜王様の【平和的なおはなし】にもめげることなく、涼しげな表情で竪琴を爪弾くガルチラ。
もうここまでくると、いっそ清々しいくらいですね。

「ゴホン、冗談はこれくらいにして…このマイラの村には、妖精の笛に纏わる言い伝えがあるのです。
…古の魔王に精霊ルビスが石にされたとき、勇者が魔を払い、勇者に付き従っていた美しき乙女が奏でた笛の音色により、ルビスを救い出した…と。」

妖精の笛は勇者が使っていたのかと思いましたが、どうやら違ったようです。

まぁ確かに、我々だって仲間と一緒に旅をしているのですから、前の勇者にも仲間がいてもおかしくはありませんね。

「妖精の笛の言い伝えに関しては解りましたけど…それがコンテストとどう結びつくのですの？」

「簡単なことですよ、ローラ姫。」

小首をかしげるローラ姫に、ガルチラは胸を張って応えました。

「古に妖精の笛を扱うことが出来たのが美しき乙女ならば、この時代の笛の継承者も美しき乙女であり、美しき乙女ならば当然のことながら浴衣も似合うはず！
そこでこの村の村長は閃いたそうです。
ならばいっそのこと、浴衣美人コンテストを開いて優勝者の賞品にしちゃおう…と。」

「…なんというか、竜王様みたいな思考の持ち主ですね、この村の村長は。」

「ちょっとまて、それはどういう意味じゃ！？」

ご想像にお任せします。

第４９歩「……ありかも」

その昔、邪悪なる魔王によって石にされたルビスを救うために、勇者が用いたと言われている妖精の笛…。
そんなレアアイテムをゲットするために、マイラの村にやって来た我々が何をしているかと言うと…

「あーダメですよー？まだ着付けが終わってないんですから動いてはー！」

「帯は黄色と赤のどっちが良いでしょうか！？」

「よいではないか…よいではないか…あーれー…」

「……どうしてこうなったんだろう…」

…今回は【彼ら】も大人気です。

「…まぁ状況はわかった。
それで、その浴衣美女コンテストとやらはいつなのだ？」

「もちろん今夜です。」

『…えええっ！？』

さらりと応えたガルチラに驚きの声をあげる一同。

「今夜って…それは流石に無理じゃない？
だってほら、アタシたち浴衣なんて持ってないし。」

ガライの村でもそうでしたけど、本当に世界を救う旅には何が必要になるか解りませんね。

「はっはっはっ、ご安心ください。
こんなこともあろうかと、彼女たちを呼んでおきました。」

そんなルミナスの苦言に対しても、動じた様子も無く胸を張るガルチラ。
おや？こういう話の流れって、つい最近にもあったような…

「彼女たちじゃと…？
ま、まさか！？」

「はい～私たちですよ～？」

「お久しぶりです！みなさん！」

「ガルチラさんに言われたとおり…皆さんの浴衣を用意してきました…。」

何処からともなく現れたのは、もはやその神出鬼没さはどこぞの創造主並な、メイド少女たちでした。

「どうしてこやつらの事をガルチラが知っているのじゃ！？」
「はっはっはっ、わたしは吟遊詩人ですから、それなりに顔も広いのですよ。」
まあこんなでも一応は伝説の吟遊詩人の子孫ですしね、確かに顔は広くても不思議ではありませんが…。
「ガルチラさんとは～、ちょっとした縁がありまして～？」
「はい！この人が以前城に来たことがあるんです！」
「女子更衣室に忍び込んでたのを…私たちが捕まえました…」
残念な意味で顔が広かったようです。

「それでは～皆さんの浴衣をご用意しましたので～？」
「こちらへどうぞ！」
「楽しい着せ替えの始まり…」
「ちょ、ちょっと待つのじゃ！」
そうして有無を言わさず宿の一室へと連れて行かれる…かと思いき

や、慌てて竜王様が待ったをかけました。

「だめですよ～竜王様～？」

「これも世界を救うための試練です！」

「諦めて…着せ替え人形になってください…」

「じゃ、じゃから！ワシばっかりいつもそれでは不公平じゃろうが！
や、やるならドラゴンたちも一緒じゃ！」

なにやら混乱気味に放った竜王様の一言に、手を止めてこちらを振り向くメイド少女たち。

「い、いや…浴衣美女コンテストなんだから…さ、さすがに僕たちじゃ無理だよ…」

アレフの言うとおり、男である我々がコンテストに出ても門前払いされるのが落ちでしょう。

そう油断したのが、全ての始まりでした。

「勇者さんとドラゴンさんですかー？」

「うーんそれは…」

「…ありかも」

『……え？』

第５０歩「はっはっはっ、愛らしい女の子がそんなに凶悪な笑みを浮かべてはい

「これで終わりですよ～？」

「皆さん、とっても綺麗です！」

「涎が止まりません…」

ようやくメイド娘たちからＯＫサインが出たのは、コンテストの開始まで１刻を切った頃でした。

「うふふ、浴衣を着るのなんて本当に久しぶりですわ。」

「そう言って微笑むローラ姫を四肢を包み込むのは、藍色を基調として、要所に菫の花を散りばめた浴衣を紅い帯にて包み上げたものです。

その完成されたプロポーションを、大人の妖艶さを醸し出す浴衣にて着飾ったその姿に、私ことドラゴンは雄の衝動の赴くままにローラ姫を押し倒し…ぶげらっ！？」

「…勝手に人の声まねをして、変な実況をしないでくれますか？」

もはや吟遊詩人というよりは、三流小説家のような実況を始めたガルチラには、床と熱い抱擁をしてもらうことにしました。

「それにしても…アンタもなかなか…ぷっ…に、似合ってるんじゃない？」

ローラ姫の肩に乗って何かを堪える様に身体を震わせながら言葉を

絞り出したのは、黄色と青の水玉模様の愛らしい浴衣を着たルミナスです。

「う、うむ…なんというか…ぷぷっ…そ、そういうのも斬新で有りじゃな！」

同じように肩を震わせている竜王様の浴衣は、向日葵の模様が夏の涼やかさを醸し出しております。

…この2人が何を見て震えているかというと、それは…その…

「うふふ、本当によく似合ってますわ、ドラゴンさん♪」

…はい、私だったりします。

「そういえば、アレフの奴はどうしたんじゃ？」

脱衣所に連れ込まれてから姿を見せないアレフの行方に答えたのは、メイド娘たちでした。

「あ～アレフさんなら～？」

「皆さんに浴衣姿を見られるのが恥ずかしいらしくて！」

「一足先に、コンテスト会場に行きました…」

…ほほぅ、私を生贄にして逃げるとは良い度胸ですね、勇者アレフ。

「はっはっはっ、愛らしい女の子がそんなに凶悪な笑みを浮かべてはいけませんぽこぺんっ！？」

「…私は女になった覚えはありません。」

本人曰く、自分は傍観者であるからコンテストには出ないで、皆の勇姿を歌にするとかいう屁理屈で浴衣に着替えなかったガルチラには八つ当たり…もとい、再度床との熱い抱擁をさせておくとしましょう。

「さてさて～、そろそろコンテストの始まるですね～？」

「皆さんなら優勝間違いなしです！」

「観客席で応援してます…」

「うむ、では行くぞ…絶対にコンテストで優勝して妖精の笛をゲットじゃ！」

『おーっ！！』

かくして、メイド娘の声援に背を押され、我々は会場へと歩みを進めました。

…今更ですが、私やアレフが出るくらいなら、メイド娘たちがコンテストに出たほうが良い気がするのは私だけでしょうか？

「そんな～私たちがコンテストなんて～？」

「滅相もございません！」

「客席で皆さんの浴衣姿をにやにやと観賞するのが私たちの役目です…」

…今日もアレフガルドは平和なようです。

第５１歩【おおおおおおおおーーーーーーっっっ！！！！！】

「ご来場の皆さんお待たせいたしました！」
これより第一回、マイラ村浴衣美女コンテストを開催致します！」

【おおおおーっ！】

ステージ上で開始を宣言した司会の声に応えるのは、明かに村の総人口を超える数の観客たちの声援でした。

「ご挨拶が遅れました！司会兼実況はは私ことシンと、本日のコンテストのために遠路はるばるお越しいただきましたスペシャルゲスト…アレフガルドの美女は全て俺の嫁と豪語する世界の創造主、精霊ルビスです！」

「おほほほほっ…お招き頂き光栄です。
…今日、此処で新たな伝説が生まれようとしています。
そして、その目撃者になるのは皆さんたちです！
さぁ皆さん！一緒に伝説の一歩を踏み出しましょう！」

【おおおおおおおおおおオーーーーーーーーーーーーっっっ！！！！！】

ルビスの演説により、もはや怒声と言った方が良いほどの歓声が上がりました。
それにしてもこの創造主…いえ、もはやこの神出鬼没な精霊が何処から現れようとツッコミを入れるのは止めておきましょう。

「さてさて…会場も盛り上げって参りましたところで、今回のコンテストについてご説明いたします。」

観客席より上がる歓声に待ったを掛けて、司会者が説明を始めました。

「これよりコンテスト出場者は、１人ずつこのステージ上に上がって自己ＰＲをして頂きます。
そして出場者全員のＰＲが終わった後、会場にお越しの皆様による投票を行ってＮｏ，１を決めるという流れになるのですが…ルビス様、何か出場者の方々に何かアドバイスはございませんか？」

「おほほほほ、そうですねぇ…浴衣美女のコンテストですから、もちろん浴衣が似合っているというのが第一ですが、後はその中に如何にして自分らしさを出せるか…ですね。」

【おおおおおおおおーーーーーーっっっ！！！！！】

ルビスの一声に何故か一段と盛り上がる客席。
もはや会場のボルテージは最高潮に達しているようです。

「なるほどのう、自分らしさか…」

そして、我々が出場者が待機している控え室では、竜王様がルビスのアドバイスに感心したように頷きました。
まぁ確かに、いくら清楚な浴衣姿だといっても、竜王様は物静かに佇んでいるよりも元気に走り回っているほうが魅力的な気もしますね。

「さて…目的は一緒とはいえ、これから先は皆さん一人一人がライバルですわ。
誰が勝っても恨みっこ無し、がんばりましょう。」

『おおーっ！』

かくして、我々の忘れられない（主にトラウマ的な意味で）一日が始まりました。

第52歩「キャーリュカちゃんこっち向いてー！！！」

「それではさっそく行ってみましょう！
エントリーナンバー1番、リュカさんどうぞ！」

「ふん、ワシの魅力にかかれば人間なんぞイチコロであることを証明してやろう！」

そう不敵な笑みを浮かべてステージへ向かう竜王様。
ちなみに、一応誘拐したりされたりしている身であることも考えて、ルミナス以外のメンバーは偽名にてエントリーをしているのですが…ルビスが実況解説なんぞをしている時点であまり意味はなさそうですね。

「おおっと！これは一人目から愛らしい少女が出てきました！」

【おおおおおおおおーーーーーーっ！！！！！】

司会者の言葉に同意をするかのように声を張り上げる観客たち。
まぁ確かに、観客の怒涛の声援にも動じることなく堂々とした態度と、見た目の幼さとのギャップが相乗効果となって現れているようですね。

「さぁそれではリュカちゃん、自己アピールをお願いしま…」

「はーっはっはっ！貴様ら人間風情に名乗る名前などない！
…と、言いたい所じゃが、あえて名乗ってやろう！
ワシは世界を支配する魔王じゃ！
さぁ人間たちよ、ワシの美貌と力の前に平伏すのじゃっ！！」

【……】

当然と言えば当然ながら、竜王様の事故アピールによって凍りつく観客たち。

まぁ、コンテストの参加者がいきなり、自分は魔王であるなどどカミングアウトをされても尚盛り上がれるとすれば、余程の肝の据わった人間か、もしくは何も考えてないかでしょうけど…

【…お、おおおおおおおおっ！！！！！！！】

【俺たちリュカちゃんになら支配されても良いぜっ！】

【キャーリュカちゃんこっち向いてー！！！】

どうやら、この会場の人間たちは後者のようですね。

第53歩「よし、では妖精の笛をげっとじゃ！」

そんなこんなで始まったコンテストも参加者の自己アピールが終わり、よいよ結果発表を残すのみとなりました。

…何事も無く終わったかと言われれば、どこぞの姫君が笑顔で放った一言で会場が凍りついたりとか、どこぞの精霊のツンデレ発言に解説の創造主が暴走したりとか、いろいろあったのですが…それはまぁ、些細なこととしておきましょう。

「ふっふっふっ、会場の人間たちもワシの魅力にイチコロじゃったし、優勝はワシが貰ったも同然じゃな！」

「何言ってんのよ、優勝はアタシに決まってるでしょ？」

「うふふ、誰が勝っても恨みっこ無しですわ♪」

アピールが終わって緊張が解けたのか、控え室にて気楽な表情で話をしている竜王様ご一行。

私も参加していたので全員のアピールを見ていたわけではありませんが、会場の歓声を聞いている限りでも、優勝はこの3人のうちの誰かで決まりでしょう。

私はどうだったか…ですか？

…世の中には黒歴史として記憶の奥底に封印しておきたい思い出があるという事を察してください。

「大変お待たせいたしました！審査の結果が出ましたので参加者の皆様はステージ上までお越しください！」

どうやら結果が出たようです。
司会の声が聞こえると、さっきまで和んだ表情だった他の参加者の方々も、気を引き締めてステージへと上がっていきます。
「よし、では妖精の笛をげっとじゃ！」
竜王様の掛け声に頷くと、我々もステージへと向かいました。

第５４歩「なん…じゃと…？」

「大変な盛り上がりを見せてきた浴衣美女コンテストもよいよ大詰め…審査結果の発表を残すのみとなりました！
数多くの美女の中から優勝してＹＵＫＡＴＡ美女の称号を手に入れ…そして妖精の笛を授与されるのは一体誰なのか！？
結果の発表はルビス様よりお願いいたします！」

司会者の熱の入った声と比例して、結果を待ち望んで静まり返っていく観客たち。
そんな中、いつになく真剣な表情をしたルビスがステージに歩いてきました。

「それでは、結果を発表します。
第一回浴衣美人コンテスト、その優勝者は…」

静けさとは裏腹に、結果を待ち望む観客と参加者のボルテージは最高潮に達しているようです。
さてさて、竜王様にローラ姫にルミナス…一体誰が優勝を手に入れるのでしょう？
まぁ誰が手に入れるにしても、これが終われば次は伝説の鎧の情報を求めてメキルドへ行くことになるのですし、優勝祝いも含めて今日くらいは温泉でゆっくりと身体を休めるのも良いかも…ああ、そういえば男湯は消失してしまっていたのでしたね。

「なん…じゃと…？」

今後の事を考えていたために、結果の聞き逃した私を我に返らせたのは、竜王様の呆然とした声でした。

「それでは会場の皆さん！優勝をしたフレアさんに大きな拍手をお願いいたします！」

【おおおおおおおおおおっっっ！！！！！！！】

…どうやら、そう簡単に次に行くことは出来ないようですね。

第５５歩「こうなったら、隙を見てあの小娘を裏路地に引きずり込んで二度と喋れないようにしてやるぞ！」

「優勝したフレアさんには、ルビス様よりトロフィーと賞品である妖精の笛が授与されますので、ステージの中央までお願いします！」

「は、はひっ！？」

司会者に促されてステージの中央へと歩みを進める、フレアと呼ばれた少女。

その年頃はローラ姫と同じくらいでしょうか、肩の辺りで切り揃えられた艶やかな黒髪と、抱きしめれば折れてしまうのではないかと思われるほどの華奢な身体を不安げに震わせている姿は、見る者の保護欲を刺激する、小動物めいた愛らしさを発しているのですが…はて、この雰囲気は何処かで…？

「…これ、どうするのよ？」

「どう…と言われてものぅ…」

まさか自分たち以外の誰かが優勝するなどとは思わなかった…と言った表情で呆然と呟くルミナスと竜王様。

自意識過剰と言われればそれまでですが、身内の贔屓を抜いたとしてもこの三人は他の参加者を圧倒（いろんな意味で）してたように見えましたし、そう思うのも無理はないことでしょう。

「まぁまぁ、優勝できなかった事は残念ですけれど、仕方がありませんわ。」

流石はローラ姫、この様な状況でも大人な対応を…。

「こうなったら、隙を見てあの小娘を裏路地に引きずり込んで二度と陽の目を見ることの出来ないような事を…うふふ♪」

…訂正、もっと腹黒になっただけでした。

「これをもちまして第一回、浴衣美女コンテストを終了いたします！最後に、優勝者のフレアさんと参加者の皆さんに惜しみない拍手をお願いします！」

【おおおおおおおおおおおおっっっっ！！！！！！！！！】

そうこうするうちに、授与式も無事に終わったようですね。
ぎこちない笑顔で観客に手を振るフレアに応えるように会場から発せられる惜しみない拍手と声援によって、浴衣美女コンテストは閉幕しました。

第５６歩「何を言っておるのじゃお前たち、暴力なんかでは物事は解決しないの

コンテストは無事に終了したわけですが、我々にとってはそれで終了という訳には行きません。
手に入れることの出来なかった妖精の笛どうするのか…今の我々にとるべき道は２つあります。

すなわち、あくまで妖精の笛を手に入れることに拘るのか、それとも諦めるのか…です。

前者であれば、我々の旅の目的を話すなどして説得するか、あるいは強硬手段に訴えることになるでしょう。
そして、後者の諦めるという選択ですが…確かに妖精の笛があれば、今後の旅の中でその力に助けられることがあるかもしれません。
しかしながら、現時点ではその力が必ずしも必要でもないというのも事実です。
世界の滅亡まで１年という期限がある以上、ここは妖精の笛に固執するのではなく、先に進むのも一つの手ではないでしょうか？

…と、そこまで考えたところで思い出しました。

「さて、それではあのフレアとかいう小娘からどうやって妖精の笛を奪還するかじゃが…」

はい、このメンバーの持つ辞書の中に、諦めるなんて言葉は無いですよね。

「この辺りはラダトームの王威も届かないですし、やはり隙を見て裏路地に引きずり込むしか…」

「そんな面倒なことしなくても魔法で火達磨にちゃえば良いんじゃない？魔法が込められてる妖精の笛なら燃えても大丈夫だろうし。」

…諦めるという言葉どころか、この人たちの辞書には穏便に事を済ませるという言葉すら無いのでしょうか？

「何を言っておるのじゃお前たち、暴力なんかでは物事は解決しないのだぞ！」

そんなツッコミを私がするよりも先に正したのは、意外なことにも竜王様でした。

考えてみれば、世界征服にすら暴力を用いることを良しとしなかったのですから、この竜王様の反応も当然といえばそうなのかもしれませんね。

「じゃあどうするのよ？」

「ふん、簡単な事じゃ。

つまりはあんな小娘よりも、ないすばでぃなこのワシの方が美人であるという事を知らしめて、会場の客とフレアとやら自身に審査結果が間違っていたということを解らせてやれば良いのだっ！」

…その考えは毎度のように突飛です。

そもそも竜王様とフレアという少女では、身体の凹凸だけならば良い勝負かもしれませんが、どちらが小娘かと聞かれれば、満員一致で竜王様という結果になりそうですが…。

「あっ…み、みなさん…こ、ここにいたのですね。」

そんな思考を遮る様に掛けられた声の主は…

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8398s/

今日もアレフガルドは平和です

2011年10月13日05時51分発行